

東崑崙・天女の山

ユイ シュ フェン
王・虚峰に登る

(5933m)

日中友好女性合同登山隊の記録

1994年・夏

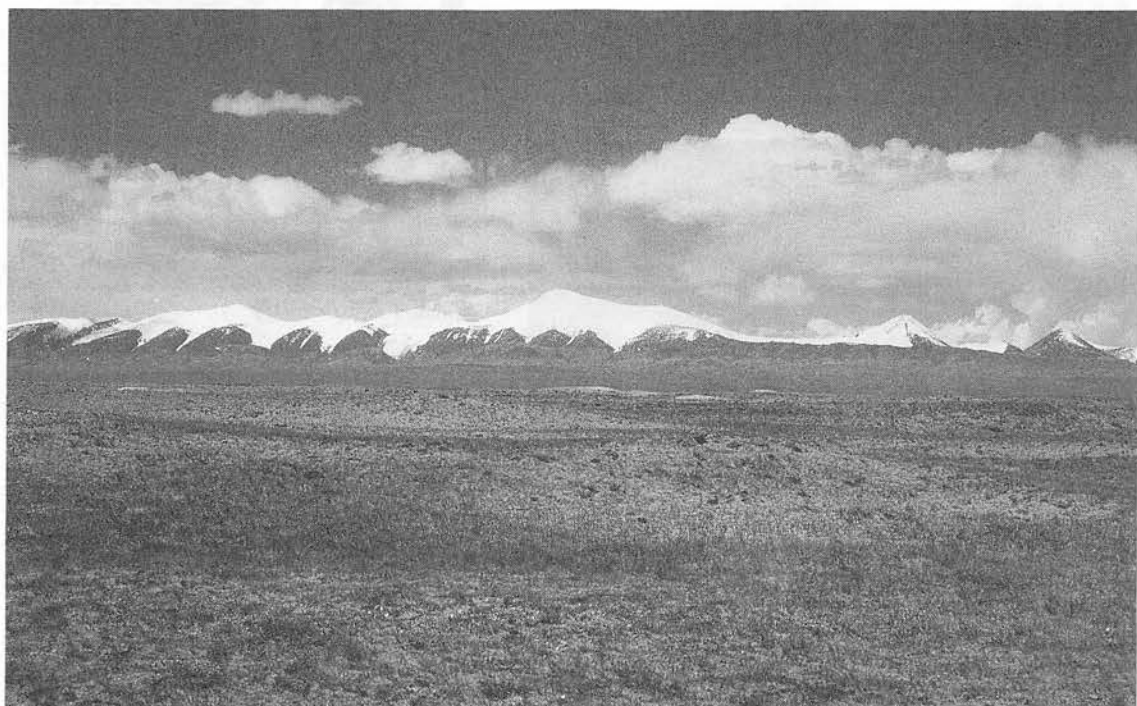
日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

(HAJ)



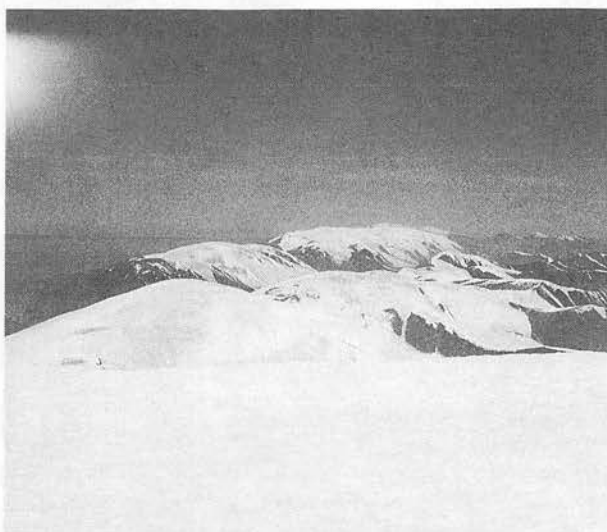




中華人民共和國・青海省玉樹藏族自治州
玉虛峰 (YUSHU FEN 5,933m)



▲頂上で中国側隊員と通訳の王さん(左は市川隊員)



▲頂上から西につらなる崑崙山脈を望む



▲西大灘にて(後ろは玉珠峰)



▲散乱するチルーの骨



▲民族衣裳を着たチベットの女性

目次

情満山野中～情熱は山野に満ちて～	総隊長 樊永寧	2
はじめに	日本側隊長 寺沢玲子	9
I. 登山隊報告		
登山隊成立の経緯～隊員結集を中心に	寺沢玲子	10
登山隊の概要		12
行動概要		13
隊員紹介		14
遠征活動報告		19
隊務報告	渉外	寺沢玲子 26
	装備	寺沢玲子 27
	タクティクス	寺沢玲子 28
	食料	辻野治子 28
	医療	寺沢玲子 29
	梱包と輸送	沢田幸子 30
	Take in, Take out の実践	沢田幸子 30
	記録	市川春代 31
	気象	辻野治子 31
感想	雑感	寺沢玲子 33
	登頂記	沢田幸子 35
	再び崑崙山脈で	市川春代 38
	他のメンバーにありがとう	辻野治子 47
II. 資料		
青海省概要	寺沢玲子	50
青藏高原探検概略史	寺沢玲子	51
中国語実用単語	沢田幸子	57
関連記事		58
Summary	寺沢玲子	68
ご協力いただいた方々		71
編集後記		72

題字 沢田幸子
 絵 市川春代

情满山野中

因为咱们爱山，所以去登山。

昆仑山，是中国西部一个由许多条山脉组成的伟大山系。它跨越新疆、西藏和青海等省区，长达2500公里，平均海拔5500多米。

在地球上，除喜马拉雅和密拉昆仑两大山系外，没有别的山系敢与它比高；在植被方面，比它更茂的山系，也为数寥寥。

昆仑山系纵贯亚洲中部，被人尊为“亚洲的脊梁”。它又是中华民族的象征和骄傲。因此，古人称它为“万山之宗”。有人将南起南岭，北到阴山，东到泰山、泰山、长白山等，都视为昆仑山的延伸和继续。还因那虎齿豹尾的西王母居住了莽昆仑，而被称为横空出世的“众山之母”。

自古以来，我国人民都把昆仑山视为“神山”对它的高、峻、险，怀有神神秘秘之感，从而为它编创了无数动人的神话。

据《山海经》和《淮南子》等古籍说，把昆仑山顶峰写得异常华贵富丽，遍地奇花异木，处处金玉周饰；吃了“不死树”的果子就可以长生不老；周围有“弱水”围绕，只有神仙才能来到这里。还说昆仑山瑶池旁的石洞里住着西王母这位女神，她有不死良药，曾被射落了九个太阳的英雄后羿讨去，不慎被羿妻嫦娥独吞入肚，从而产生了“嫦娥奔月”的故事。后来，人们根据这些神话，又编出王母娘娘在瑶池开蟠桃会和《白蛇传》中白素贞在昆仑山盗仙草救夫等故事了。

在离昆仑山口不远的地方，便是著名的玉虚峰。玉虚峰，位于昆仑山口东面。这是一座海拔5933米的雪山，峰顶高耸巍峨，山体通体冰封雪裹，山腰白云缭绕，看上去犹如一位银装素裹，婷婷玉立的女子，昂然挺立在群山之上。

玉虚峰相传为玉皇大帝的女儿玉虚神女居住的地方。传说，当年玉皇大帝见昆仑山雄伟高大，气势轩昂，景象万千，且离天廷很近，便在昆仑山顶修建了一座轩辕行宫。玉帝的女儿玉虚得知后，很不服气，说玉帝霸占的地方太多了，不仅占了天上，还要把地上的好地方也据为己有。玉帝没办法，只好把其中的一座山峰让给了玉虚。玉虚便在这座山峰上当自己修筑了一座冰清玉洁、俏丽奇美的行宫，而且经常带着众姐妹到此游玩，所以，这座山峰被称为玉虚峰。

一九九四年夏季七月份，我有幸与日本喜马拉雅研究会唯一的女理事寺沢玲子女士，作为中日双方的登山队员，共同进山，攀登昆仑山玉虚峰，内心感到非常的荣幸和兴奋。

女子联合登山，这在青海省登山队还会还是首例。

能够促成这次活动的顺利进行，还得感谢日本喜马拉雅研究会高山委员会高山森欣一先生，是他和寺沢女士的努力与这一活动分不开的。

我们这次登山于7月3日离开西宁向山区出发，途中经过几天的适应训练，于7月10日晚到达玉虚峰大本营。11日、12日适应训练与侦察登山路线：13日休整一天，14日经过中日双方队员6个多小时的共

共同努力奋战，于当日中午12时20分成功登上了顶峰。

虽然，登上顶峰，可当眼前出现铁塔时，以往那种登顶成功的激动和兴奋已全然没有了，代替而来的好象被人泼了一盆凉水，头和心都凉了。真不相信自己的眼睛，可揉之眼睛，依然还存在。我作为登山总队长，当时感到很尴尬，的确没志到会这样，在此，我仅代表个人向山森先生和寺沢队长深表歉意。

这次中日女子联合攀登玉虚峰的情景，真是历历在目，无爱很深；又双方队员友好相处，互相协助，团结一致，当了一个共同的登山目标而努力着。

这次使我真正看到了日本赛马扎雅木协会人的那种登山的勇敢、毅志的顽强和坚韌不拔的拼搏精神。

我爱每个女队员，现在回忆起当时的情景，就好象刚之发生在昨天一样。

记得刚到黑马河那天市川春代女士有些高山反应，头痛；沢田双牙齿痛，但高渡川队员仍坚持一起训练，吃苦精神令人佩服。

辻野心地善良，人长的也很漂亮。尤其她那学骆驼走路的样子，逗得大家发笑。她被大家称为“可爱的”。

沢田双虽然53岁了，但很聪明，中国语学得很快。

寺沢队长人善良，友好，并具有现代女性的气派，就是很怕喝中国的白酒，一碰就醉。在我心中留下很深的印象。

从这次感受最深的就是世界女子登山方面的交流应当多搞一些，才能更好地推动各国女子登山运动的更进一步发展。这次与日本方面的登山联名中，使我看到了我国技术装备方面的贫穷与落后。今后，为了更好地发展和推动女子登山事业的发展，我将不断地去努力奋斗！

在此预祝日本喜马拉雅登山协会的事业日益发展和兴旺！

中国青海省登山协会

玉虚峰女子登山队队长 樊永宁

一九九五年元月十六日晚

情熱は山野に満ちて

樊 永寧
総隊長

私は山を愛するが故に山に登る。

崑崙山は中国西部にある、数多くの山脈からなる偉大な山系である。それは新疆をまたぎ、西藏に至る長さ2500km、平均海拔は5500m(註:4500m)を越える。この地球上、ヒマラヤとカラコルムの両大山系に比し、高度並びに長さにおいてこれを越すものはいたって少ない。

崑崙山系はアジアの中部を貫いているため、人々は敬愛を込めて“アジアの背骨”と呼んでいる。これは中華民族の象徴でもあり誇りでもある。そのため古人はそれを“万山の祖”と呼んでいる。人は、南は南嶺に始まり北は陰山に至り、東は舟山、泰山、長白山まで、すべては崑崙山に続くといっている。それ故に、虎の牙をもち豹の尾をもつ西王母の住む崑崙は高く空を射ぬき“万山の母”とも呼ばれている。古来、我が国の人民は崑崙山を“神の山”としてあがめ、山の天変、複雑さ、険しさ、危険さは神秘性を秘め、崑崙は人を感動させる数限りない神話をおりなした。

《山海経》と《淮南子》の古籍によれば、崑崙山頂の峰々はいつの世にもかぐわしく美しく、地は珍しい木々や花々に彩られ、いたる処に金銀玉珠の飾りがなされ“不死樹”の果実を食すると不老長寿がかなうがその周囲には“黒河”が流れ、ただ神仙のみがここに来ることができると記されている。

更に云う、崑崙山中腹の石の洞には西王母という女神が住み、女神は不老不死の良薬をもっていたが、かつては九個の太陽を射ち落とした英雄、羿に射たれ、うかつにも羿の妻、嫦娥に一人占めされてしまった。“嫦娥奔月”の故事はここから生まれている。以後、人々はこの神話にもとづき、西王母皇后が仙境で桃の節句をひらいたり、“白蛇伝”中の白素貞が崑崙山に薬草を求め夫を救う等々の物語を生んでいる。

崑崙山口より少し離れた所に、有名な玉虚峰がある。玉虚峰は崑崙山口の東面にある海拔5933mの雪山である。頂きは高くそびえ、山並みは雪と氷に閉ざされており、中腹には白雲がたなびく。それはあたかも白銀の衣装をまとい、すっと立っている女性のようにあり、山群の中でひとときわきわだつ山である。

玉虚峰は玉皇大帝の妹、玉虚神の住んだ場所だと伝えられている。伝説によると当時、玉皇大帝は崑崙山が雄大で昂然とそびえ、美しくかつ天にも近いと、崑崙山頂に皇帝の行宮を建築した。これを知った玉帝妹の玉虚は、玉帝の占めている土地は広すぎる、天上を占めているだけでなく、地上のよい土地までも、己れのものにしていると不満をもらした。玉帝はやむなく、そのうちの一峰を玉虚に与えた。玉虚はこの山の頂きに自分の為に、氷のように美しく、玉のように清らかで秀麗な行宮を建築し、姉妹とつれだってしばしばここを訪れたため、この山は玉虚峰とよばれた。

1994年の夏7月、私は幸せにも日本ヒマラヤ協会であた一人、女性の理事である寺沢玲子女史、中日各方面の登山隊の人々と隊を組み、崑崙山、玉虚峰に登ることができ、素晴らしい栄光と心の昂まりを感じている。女子の合同登山は、この青海省登山協会においても初めての例である。この度の活動が順調に進行し得たことを、日本ヒマラヤ協会専務理事山森欣一先生に感謝いたします。山森先生と寺沢女史の努力はこの度の活動と切り離すことのできないものです。

私共のこの度の登山は、7月3日、西寧を離れ山域に向け出発、途中数日の順応訓練を行い、7月10日、玉虚峰のベースキャンプに到着した。11、12日の両日は順応訓練と登山ルート の 偵察を行い、13日は一日休養。14日、中日双方の隊員は6時間余の奮闘の末、昼の12時20分、登頂に成功した。

しかし、頂を極め、眼前に鉄塔が現れた時はいつもの登頂成功の感動と興奮は消え去り、あたかも冷水を浴びせられたかのように心身ともに凍りついてしまいました。自分のまなこを信ずることができず、まなこをこすってみましたが、それは現然と存在していました。その時、登山隊長としての私はうろたえてしまい、どう対処したらよいかわかりませんでした。が、ここに私は個人として、山森先生と寺沢隊長に深甚なるお詫びを申し上げます。

この度の中日合同の玉虚峰登山の情景は、ありありと目に浮かび深い感動をおぼえます。双方の隊員は友好的に対応し、互いに協力、団結して、共同の登山を目標に努力しました。この度、私は日本ヒマラヤ協会の人々の登山にあたっての勇敢さ、意志の強さ、堅忍不拔な不倒不屈の精神をみることができました。

私はすべての隊員を愛し、今でも当時の情景を想いおこすと、それは

あたかも昨日のことのよう感じます。黒馬河に着いた時、市川春代女史は高山病による頭痛を訴え、沢田ママは歯痛がありましたが、高度順応訓練の時は断固として共に訓練をする不屈の精神は、他の人々を感動させました。辻野さんは心やさしく、年はいってもとても美しく、彼女がラクダの走るマネをした時は皆の笑いを誘いました。彼女は皆から“可愛い人”と呼ばれていました。沢田ママは53才だというのに、大変、頭が良く、中国語の進歩も素晴らしいものでした。寺沢隊長は、おだやかで友好的ながらも、現代女性としての気概も兼ねそなえていましたが中国の白酒には弱く、一杯飲むとすぐ酔ってしまいました。私の心に深い印象をしるしています。

世界における女子登山隊間の交流は更に強化されるべきであり、このことによって各国における女子登山活動が更に発展できることを、この度の活動から強く感じました。また、この度の日本との合同登山の中で私は我が国の技術、装備面での貧しさと遅れを痛感しました。

今後共、更なる発展と女子登山事業の発展をすすめるため、私は不断の努力、奮闘をいたします。

日本ヒマラヤ協会の事業の益々の発展と隆盛をお祈りいたします。

1995年1月16日 記

江尻健二 訳

はじめに

寺 沢 玲 子

日本側隊長

1994年日中友好女性合同登山に際しましては、皆様から暖かいご支援とご協力を賜り、本当に有難うございました。心からお礼申し上げます。

日本ヒマラヤ協会（H A J）では1967年の創立以来、ヒマラヤ諸国との友好・親善並びに相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開して参りました。

その一環として、1985年には中国初の女性合同隊を西部崑崙山脈にある5,850mの未踏峰に送り出し初登頂に成功、当時無名であったその峰に8名の女性隊員に因んで「八花氷山」と命名する誉に浴する事が出来ました。その後1986年、インドとの合同で当時外国人立入り禁止地域であったヒマチャル・プラデシュ州キンナウル地区の聖山キンナウル・カイラス6,473mへ、1992年、再びインドとの合同でカメット山群・中印国境上に位置する6,940mの未踏峰へと、過去三回の女性合同登山隊を組織して参りました。

この度の合同登山は、青海省登山協会登山隊隊長として活躍中の樊永寧さんからの申入れに応じて組織されました。樊総隊長指揮下、青海省登山協会初の女性登山隊として、7月14日12時20分日中の女性7名と中国人通訳の計8名が紺碧の空の下、東部崑崙山脈の聖山玉虚峰 5,933mの頂に立つことが出来ました。登山と云う共通の体験を通して、安全性の確保は勿論の事、生活の基盤となる言語や宗教・生活風習・社会体制などの異なる文化の中で育まれてきた両国の隊員が相互理解や親善を深めることが出来た事は、合同登山隊ならではの何よりの成果であると思います。

登山を通しての私達民間レベルでの外交が、細やかながらも友好親善の促進となる事を願って止みません。

最後に、お世話になりました皆様に改めて感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

I . 登山隊報告

登山隊成立の経緯～隊員結集を中心に

登山隊の概要

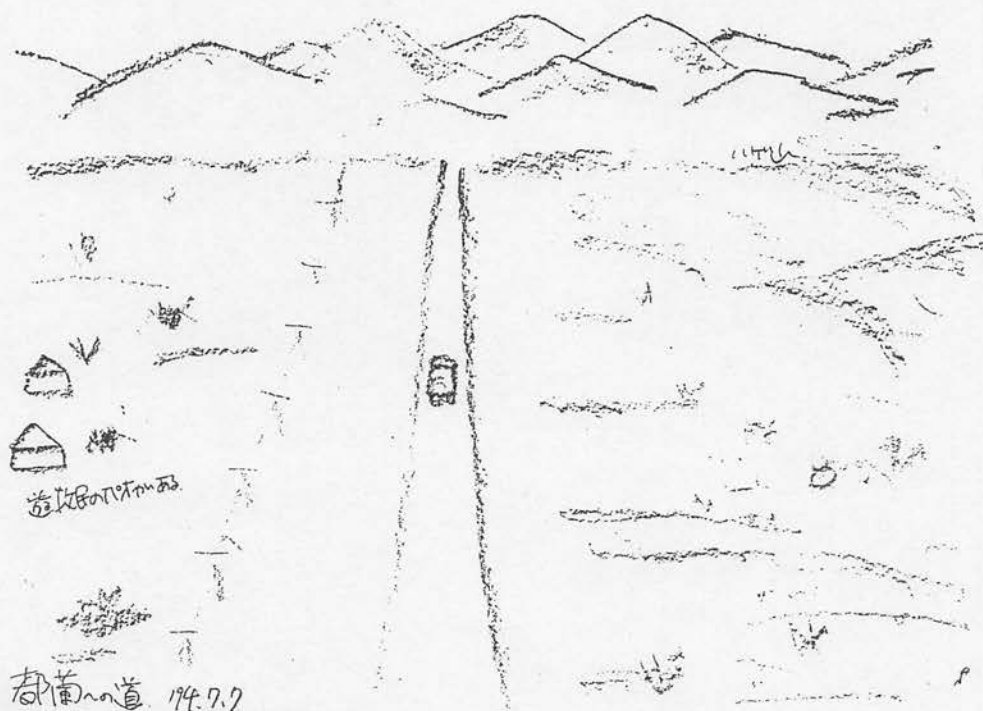
行動概要

隊員紹介

遠征活動報告

隊務報告

感想



1993年夏、玉珠峰サマーキャンプの連絡官を務めた樊永寧女史からの土産と手紙を山森さんから手渡された。女史とは1991年12月に東京でお会いしたことがあるものの、それ以降はお互いに賀状のやり取り以外のお付き合いはなかった。中国語は全く理解出来ない私にもひしひしと伝わってくる熱意で、女性合同登山の希望を紙面一杯にしたためていた。樊さんの懐かしい笑顔を思い出した。

樊さんから提案された目的の山は、崑崙崙を挟んで玉珠峰の西側に位置する神話の峰玉虚峰であった。後日の樊さんの談によると、玉珠峰登山の折に合同登山の希望を山森さんに打ち明けた際、玉虚峰が候補として浮かんだのだそうである。西王母伝説の地の、玉皇上帝の妹妃玉虚の棲家とされる玉虚峰は聖山故に未だ未踏との事、その峰で日中女性が共に登山活動を展開する…想像するだけで夢が広がる。

しかし、樊さんの希望に応えたいが隊員候補が集まらない、個人的には費用も捻出できそうもない…諦めかけていた頃、市川春代からは是非ともこの登山隊に参加したい旨の電話があった。市川とは1987年のHAJ女性ヌン登山隊で知り合った仲である。1987年の女性登山隊は北海道の有志で計画されたもので、そこに渉外の助っ人として参加したのが寺沢であった。順応しきれずにアタックメンバーからの離脱を申し出た市川と自ら“雇われ”の意識に縛られて最初から頂上を諦めていた寺沢は、何時の日にかまた共にヒマラヤの地を訪れる機会を伺っていた。この度の崑崙の山旅に向けての市川の熱意には、圧倒される何かがあった。

同じ北海道在住の辻野治子は、市川に熱心に誘われていたと云う。辻野との出会いはお互いに辛いものであった。1993年秋、岳兄佐々木裕一氏率いる登山隊がガルワールの秀峰ニルカントで懸垂氷河の崩壊による雪崩に遭い、佐々木隊長と5人の隊員が行方不明となった。その内の1人が、当時辻野が事務局長として所属していた帯広勤労者山岳会の会長高野春夫氏であった。留守番本部の要請で辻野と2人でデリーに飛び、5日間に渡って懸命に事後処理にあたった。登山隊唯一の生存者松山昭氏と

3人で過ごしたデリーでの時間は短いものであったが、3人とも幾度もの遠征を共に過ごしてきた仲間の様な、説明し難い連帯感を感じている。きっと亡き岳兄がせめてもと遺してくれた財産なのだろう。

もう1人欲しい!登山隊の性格を考えると、登攀力はさほどなくとも協調性があり、なによりおおらかなメンバーが欲しい。そう思って当時寺沢が在籍していた山岳会の仲間である沢田幸子に誘いをかけて見た。子育てを終えてから若かりし頃の夢を追い掛けているその姿は、ある意味では登山を志す大半の女性にとっては励みになる様な気がする。53歳と云う年齢を気にしながらも、快く参加の意志を表明してくれた。これで日本側の顔ぶれはとりあえず揃った。

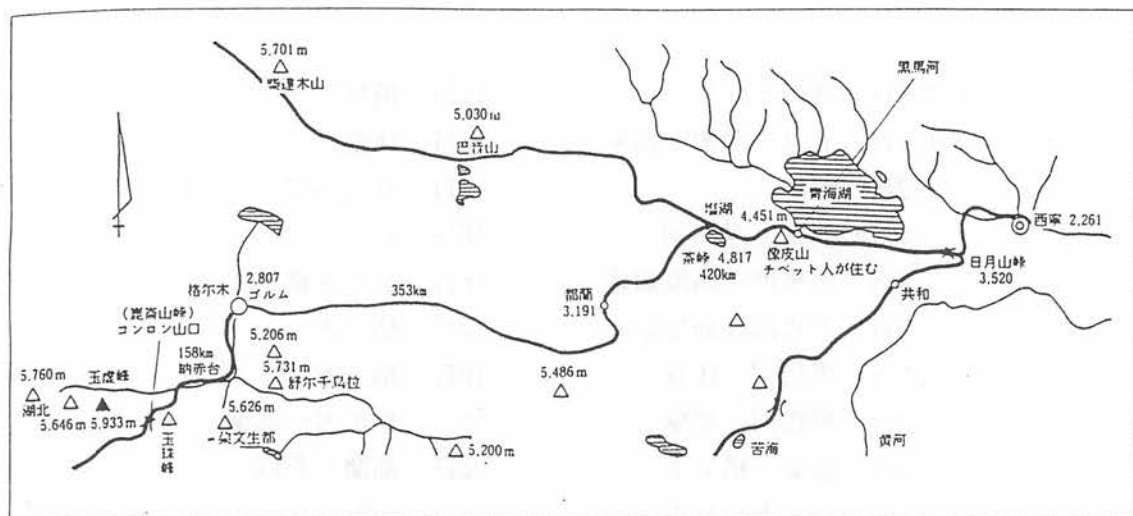
中国側の選抜された2隊員は歳若く、登山は初めてと云う。因に1人は中国全土の柔道軽量級のチャンピオン、もう1人は自転車競技のNO.2だとか。登山隊員がこの様な形で選抜されるケースは合同登山では珍しくもなく、これまでの経験からすればむしろ一般的であろうと思われる。

目指した峰は位置的に見て、恐らく技術的な心配は全くないであろうし、逆に云えば純粹な登山としての面白みには欠けるのではないか、との思いがあった。市川と辻野に少々申し訳ない気がしないでもなかったが、未踏の山に足を踏み入れるチャンスは滅多にない。特に1985年に崑崙山の西部の未踏峰に登頂し八花氷山と命名する榮譽に浴した市川には、今度は東部での初登頂を果たして欲しい、そんな思いもあった。

こうして成立した日中友好登山隊は、崑崙伝説の地の未だ見ぬ白きたおやかな峰への思いを胸に、彼の地を目指したのである。



玉虚峰（ユイシュ・フェン）位置図



登山隊の概要

1. 隊の名称

日中友好女性合同登山隊1994年

2. 目標の山

中華人民共和国・青海省玉樹藏族自治州

玉虚峰 (YUSHU FEN 5,933m)

3. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会

中華人民共和国・青海省登山協会

4. 隊の構成

総隊長 樊永寧 (37) 通 訳 王 琦

隊 員 应連文 (22) コック 韓西安

馬占鳳 (22) 運転手 李永峰

隊 長 寺沢玲子 (42) " 王 宵

隊 員 沢田幸子 (53)

市川春代 (44)

辻野治子 (37)

5. 推進の組織

日中友好女性合同登山隊実行委員会

会 長 稲田 定重 (H A J 理事長)

副 会 長 山森 欣一 (同専務理事)

実行委員長 寺沢 玲子 (同常務理事・隊長)

事務局長 尾形 好雄 (同常務理事)

実行委員 八木原園明 (同常務理事)、中

川裕 (同常務理事)、隊員

6. 登山隊事務局

〒169 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会 TEL 03-3367-8521

7. 現地連絡先

青海省登山協会 中華人民共和国青海省西

寧市山陝台 1 号 TEL 971-38922

8. 結果

7月14日、南面BCから通訳を含む8名全員登頂。未踏峰という事であったが、頂上には玉珠峰と同型の鉄塔が建っていた。



行動概要

6月30日	成田～北京	12日	偵察
7月 1日	北京～蘭州～西寧	13日	休養
2日	西寧	14日	BC～頂上～BC
3日	西寧～黒馬河	15日	BC
4日	黒馬河（高度順応）	16日	BC～格尔木
5日	黒馬河（高度順応）	17日	格尔木
6日	黒馬河（休養）	18日	格尔木
7日	黒馬河～都蘭	19日	格尔木～都蘭
8日	都蘭～格尔木	20日	都蘭～西寧
9日	格尔木～崑崙山峠 ～格尔木（高度順応）	21日	西寧
10日	格尔木～BC	22日	西寧～北京
11日	偵察	23日	北京
		24日	北京～成田



199. 7/13.
BC.

隊員紹介

①生年月日②住所・電話番号③所属山岳会④勤務先⑤海外登山歴⑥人物紹介

寺沢玲子

Reiko Terasawa



① 1951年8月② 埼玉県越谷市③ わらじの仲間
OG④ 主婦⑤ 1980年ネパール、イムジャ・ツェ
(6,169m) 1986年インド、キンナウル・カイラス
(6,473m) 隊長 1987年インド、ヌン(7,135m) 1988年中
国、ゲニ(6,204m) 初登頂 1988年パキスタン、ガッ
シャーブルム II 峰(8,035m) 1992年インド、サラスワ
ティ(6,940m) 隊長、初登頂⑥ 若い頃のヤブ山志向と
ヒマラヤ登山が、どこで結び

ついたのか理解に苦しむが、沢登りから足を洗ってのヒマラヤへの情熱には頭が下がる。にこやかに笑いながら緻密な作戦で、一気に全員登頂という鮮やかな手腕に心から敬意を表する。異文化・価値観の相違からくる考え方のズレも多少あったが、日中親善でも大いに目的を達することができたのは、彼女の暖かな人柄によるところが大きい。堪能な語学力を生かして、これからも世界の山を華麗に舞うことだろう。

沢田幸子

Sachiko Sawada



① 1940年12月② 東京都豊島区③ わらじの仲間
④ 主婦⑤ 1982年スイス ブライト・ホルン(3,785m)
登頂 1989年台湾、玉山(3,997m) 登頂 1991年インド、ヌ
ン(7,135m) 1992年台湾、北大武山(3,900m) 登頂 199
3年パキスタンブロード・ピーク(8,047m)⑥ 一男二女
を成人させ、50歳でヒマラヤのために長く勤めた銀
行を退職。台湾の沢登りは数知れず。(某隊員のつぶ
やき-53歳のこ

のバイタリティはどこから出てくるのだろうかなー。) 友好登山隊の“お母さん”として日中の隊員、スタッフに親しまれ、何げない心遣いと、隊きっての酒豪(?)で隊を盛り上げてくれた貴重な存在。寺沢隊長と中国側の話し合いが複雑になりかけると、両手

をズボンのポケットに入れたサングラス姿の“お母さん”が登場するだけで何故か、まるくおさまること数回、“影の隊長”として活躍。現地では「草原情歌」を中国語で歌い、覚えてたの中国語を出来の悪い生徒たちに繰り返し教えてくれた。



市川春代

Haruyo Ichikawa

①1950年1月②北海道苫小牧③美唄岳

友会④市立すすらん保育園⑤1985年中国、八花氷山

(5,850m)初登頂1987年インド、ヌン(7,135m)

⑥成田から北京に着いたらすぐに保育園の子供たちあてに絵はがきを送る。いつも穏やかな人柄の本物の保母さんである。西部崑崙山脈の八花氷山に次ぎ、2回目の崑崙山脈、2回目の日中合同女性登山である。山に入れば、すごい

ガッツの持ち主であるが、遠征を未知の場所に行くということからもその環境をととても楽しんでいるのが印象的であり、中国側の隊員からも中国にお嫁に来ませんかと誘われていた。彼女が折々に描くスケッチは雰囲気良く表していて、この報告書にも使わせてもらった。



辻野治子

Haruko Tsujino

①1956年12月②北海道士別市③蘭岳友

会、札幌登攀倶楽部④主婦⑤1990年ケニア、ケニア山

(レナナ・ピーク4985m)登頂⑥何て可愛らしい人！初対面でたれでもそう思うらしい。私も然り（ヒマラヤ登山をするような人には見えなかった）。

中国側隊員にも“可愛いい”というニックネームをもらい、全員のマスコットの存在だった。唯一の難点はミセスであること。家族は趣

味を同じくする素敵な伴侶と猫2匹。ルート工作不要の登頂に少々ものたりなかったようだったが、そのファイトを次回の遠征につなげてほしい。

樊永寧

Fan Yong Ning



①37歳④青海省登山協会⑥ガッシリとしたその体格のイメージからは想像出来ないほど心優しく、細やかな気遣いをしてくれた我らが総隊長。年若い中国側隊員には、時には母の如く、時には姉の如く慕われていた。我々日本側オバサン隊員は言葉の壁もなんのその、誠実な彼女の心根にすっかりホレ込んでしまい、再びの山旅を心から望んでいる。

应連文

Wen Ying Zian



①22歳④青海省登山協会⑥柔道の選手という快活なお嬢さん。馬さんと同年齢で山登りは今回が初めてだ。簡単な中国語でもなかなか覚えられない日本側隊員に辛抱強くことばを教えてくれた。登頂日に体調をくずして辛そうだったが、頭痛や顔のむくみにも負けず、頑張って登頂したという根性の持ち主だ。警察官の彼にも、はればれと報告できたかな。

馬占鳳

Ma Zhan Feng



①22歳④青海省登山協会⑥自転車競技をやっているという体格の良いお嬢さんだ。山登りは今回が初めてだが、若さとファイトで登頂する。高所での滞在が短期間だったので、下山後に高所障害の症状が現れて苦しんだ。得意とするスポーツは違っても、座さんと大の仲良しだ。二人とも明るく、おちゃめで、礼儀正しい。「日本へお嫁にいらっしゃい」と言ったら、頬を赤く染めていた。

王 琦

Qi Wang



④青海省登山協会・通訳⑥北海道に酪農研修性として来日し、日本語を覚える。「～だからさあ～」という北海道弁が混じったユーモアたっぷりの通訳は、日中の相互理解に大いに役立ち、隊員の気持ちを和ませてくれた。日本の隊員が食事をしていると必ず「お口に合いますか」と気をつかって聞いていた。久しくこのような日本語を耳にしていなかった某隊員曰く「帰国したら夫の前で三つ指ついてこのことばを言ってみようっと。」（実行したということは聞いていない）。酒に強く、「酔っちゃいましたねえ～」と言いながら陽気に若い中国隊員をからかっているかと思うと、日本語のテキストを取り出す勉強家である。

李永峰



④青海省登山協会・運転手⑥日本側隊員の乗るバリエロをずっと運転してくれた。隊員が全員タバコを吸わないので、運転中は好きなタバコも吸わず、ラジオもつけないで、我々にとっても気をつけてくれた。炎天下の砂漠の中、延々と続くまっすぐの道をそうやって運転するのは本当に大変だったと思う。また、真面目なだけでなく、冗談も言って、みんなをいつもなごませてくれた。そんな人に対する心づかいには感心させられ、みんな李さんのファンになった。三田村邦彦に似ているとは隊員の一致した意見である。

王 齊

④青海省登山協会・運転手⑥李永峰ドライバーと、毎日、辻野隊員を巡っての掛け合い漫才をやったのけ、いつも笑いを振りまいていた。人一倍アルコールが好きなようであるので、ハメをはずさなければよいかと少々心配でもある。西寧市内で看護婦をしている臨月の夫人を気遣っている姿が印象的であった。今頃は無事パパになっているのでは。



韓西安

④青海省登山協会・コック⑥いつもニコニコ笑みを絶やさず、やさしいおとうさんという感じで、隊員を見守ってくれていた。歌がとてもしょうずで、そのバリトンの声にはほれぼれとさせられた。BCでは高所順応がうまくいかず、つらそうだったが、隊員みんなが癒せることができないで（若干2名、むしろ、太った隊員もいた）、日本に帰ってきたのも彼の力によるところが大きい。



▲ B C で

遠征活動報告

青海省へ

6月30日 成田ー北京

昨夜は淑女(?)登山隊の壮行会。その余韻を残しながら成田空港に集合。隊員の家族、知人の見送りを受ける。搭乗手続きの後、H A J ムスターグ・アタ登山隊隊長、飛田氏と昼食。お互いの健闘を話し合う。C A 926便は、5分遅れで離陸。日常の睡眠不足を取り戻すかのように、眠狂子の世界に入る。中国時間18時05分北京に到着。中国登山協会の車で市内へ。空港から市内への高速道路、高層ビル、建築ラッシュ、大都会の印象を強くする。19時40分天橋ホテル到着。

7月1日 北京ー蘭州ー西寧

午前中はミーティングや隊務に時間を費やす。北京から西寧へのダイレクト便が7月14日まで運航していないため、まず蘭州へ飛び、その後、車で西寧へ行くことになる。17時45分北京発。眼下に砂漠化した大地が波うったように広がる。20時薄暗くなりかけた蘭州に到着。青海省登山協会の通訳・王琦、運転手・李永峰、接待・張全英さんの出迎えを受ける。通訳の王さんは、酪農研修生として網走に来て日本語を覚えたということである。市川、辻野が北海道から来たと伝え、とても驚き、懐しそうに「北海道の親戚ですね」と話してくる。

夕食を取りながら、蘭州から西寧まで車で5時

間要すると聞き、一同驚く。彼等は、5時間かけて迎えに来てくれ、そして帰るのだ。21時40分西寧へ向けて出発。西寧への道路は蘭州市内を通らないとのこと。夜のためどのような地を走っているのか解らないが、荒涼とした感じが伝わってくる。満点の星空。

7月2日 西寧

2時20分西寧で一番立派なホテル青海賓館に到着。ただ眠るのみ。11時青海省登山協会へ。呉延義秘書長と会談。今回の合同登山の総隊長・樊永寧、隊員の馬占鳳、应文蓮さんと合流、打ち合わせをする。寺沢隊長は、3年前に樊総隊長と会ったことがあり、懐きそうである。中国の隊員は2人とも22才。学校を卒業したばかりで、自転車と柔道の選手だったということである。登山は今回が初めてらしい。22才という若さに、たのもしさとちょっぴりうらやましさを感じる。登山協会の前庭で隊荷を梱包し、キャラバンの準備をする。19時歓迎会。日本側は、この登山のために作ったTシャツを着て出席する。終始、和やかな雰囲気。日中歌合戦が22時頃まで続く。

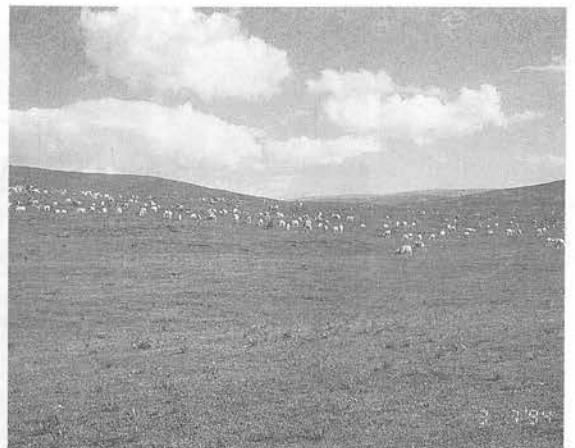
高度順化

7月3日 西寧ー黒馬河

11時05分パジェロ1台、小型トラック1台に分乗し黒馬河に向けて出発する。今日から西寧とラサを結ぶ幹線道路ー青蔵公路ーを走ることになる。西寧を出ると、あたりは菜の花の花畑と色づく前



青海省登山協会でキャラバンの準備



草原にひろがる羊の群れ(黒馬河)



の青稞麦畑に変わる。空の青と黄、緑の見事なコントラストである。文成公主が長安から吐蕃に嫁ぐ時に、故郷への思いを断つために、たずさえてきた日鏡と月鏡を割ったと伝えられている日月山峠3,520mを越え、しばらく走ると地平線が青くなってくるのが見える。青海湖である。19時黒馬河3,400mに着く。高度順応のため3日間、滞在する予定である。この辺一帯は草原で3,500~4,000mほどの山々が連なり、キャンプ地の傍にはチベット人がヤク、羊などを放牧する時に使用する土壁の住居がある。テントを設営したり、トイレを掘り終え、22時夕食を取る。青藏公路を行き交うトラック、オート三輪車の騒音が、昼夜絶えない。満点の星空と三日月。

7月4日 黒馬河

高度順応。通訳を含む8人で、3,480mまで登り降りをくり返し2時間ほど行動する。通訳の王さんは「みんなと一緒に頂上へ行きたい」と意欲的である。草原にはウスユキ草や忘れ名草に類した花が咲き、幾重にも連なる山々の谷間には、遊牧民の夏場の住居が点在している。のどかである。誰かが「草原情歌」をうたい出す。

沢田に歯ぐきの痛み、市川に頭痛、むくみの症状が出る。中国側隊員は、西寧の標高が2,210mということもあり、3,400mの高さはちょっとハイキングにきた程度なのだろう、とても元気が良く、時々、隊員を相手に柔道を楽しみ、男性スタッフが投げ出されると、拍手と笑いが起きる。夕方、日本側4人は青藏公路沿いの小さな丘に登る。西寧へ向かうトラックがクラクションを鳴らし手を振っていく。夜、雨が降る。

7月5日 黒馬河

高度順応2日目。昨日より高度を上げることにする。チベット人のチョルテンがある山に登ることにし9時40分キャンプ地を出発する。途中のガレ場では、樊総隊長が中国側2隊員に指示を与えている。最高気温39.4℃。快晴、陽差しが強い。上空は群青色。湿度が低いので汗ばむ程度である。休むたびに水分を補給する。崑崙山脈から15年間の歳月を経てきたというミネラルウォーター“硬源水”がおいしい。チョルテンは祭りのためのもので、同じ尾根上に石で作った直径80cmほどの台がある。この台で食べ物を燃しながら祈るらしい。標高3,650m。高山植物の花が咲き乱れ、蝶が飛び交うなかを下山するので休憩も多くなる。そのたびに中国語（日本語）の勉強会となる。12時50分キャンプ地着。中国側スタッフが切ってくれた西瓜で喉をうるおす。ラグビーボールのような円形の西瓜である。20時夕食、登山の成功を願ってアルコール、羊の肉スープ、青海湖の鱗のない魚のスープやつまみ類が食卓に並ぶ。沢田の歯ぐきの痛みは辻野の薬で徐々に治まり、市川の頭痛も夜のみとなる。

7月6日 黒馬河

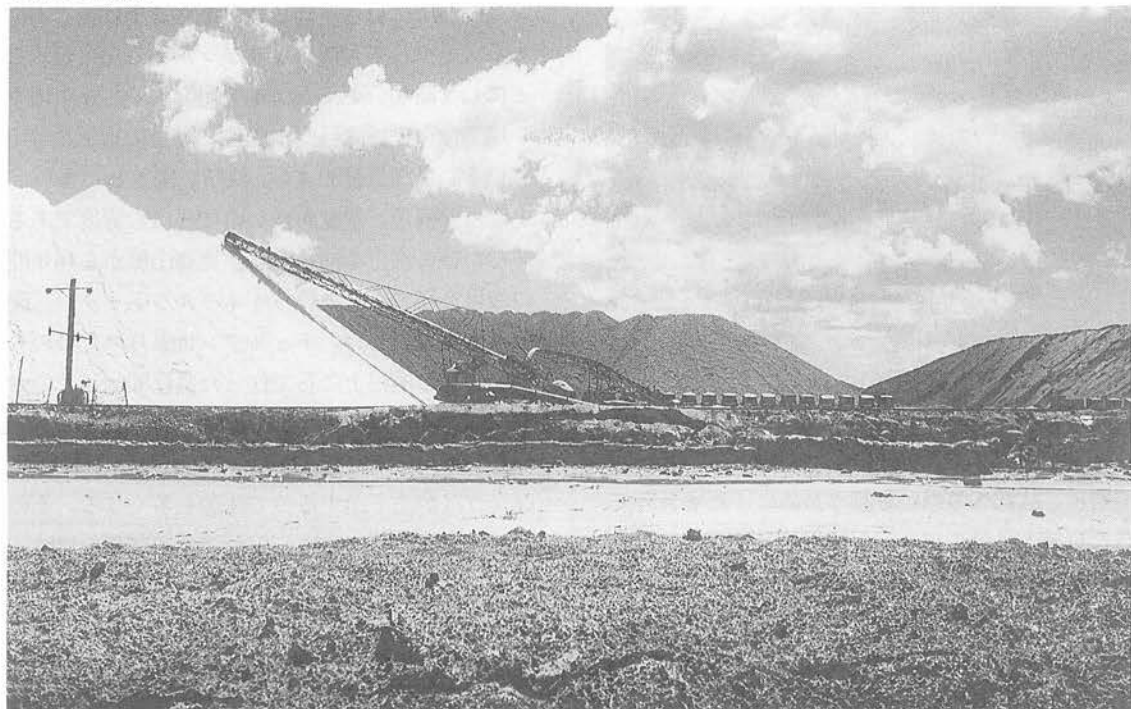
休養日。休養日を待っていたかのように、雨とあられが降る。寒いので時々シュラフに潜り込みながら、それぞれ思い思いに過ごす。隊長は難しそうな表情で書類にとらめっこ。テントの中は暗いので日中よりヘッドランプ、ロウソクをとます。20時50分外はまだ明るい。雨が上がるが寒い。

（記：市川春代）

崑崙山へ向けて

7月7日 黒馬河—都蘭

高度順化を終えて都蘭に向かう。荷造り、清掃の後10時30分出発する。途中茶卡の先にある塩湖へ立ち寄る。湖岸にたまってきた大量の塩をトロコに入れて運搬するために、湖畔までレールが敷かれている。運ばれた塩は野積みになされ、コンクリートミキサー車みたいなベルトコンベアーで、トラックに移されて出荷される。白いのは食用に、濃灰色のは工業用に使われる。私たちはその黒っぽい塩の野積みされている小山に上がってみた。コークスの山みたいだった。日本で塩が不足した



ら、まっ先にH A Jに送ってあげましょう、と言われた。青海省にはこのような塩湖が40もあり、これは中くらいの大きさだという。日本の製塩業とは規模が違う。

茶卡に戻り食堂でラーメンを食べる。このあたりはモンゴル族が目につく。民営の食堂の方が安くておいしく、接客サービスも良いとの話である。

見渡す限りの大草原に点在するゲル、そしてヤクや羊の群れ。市川さんが「あ、カシミヤのセーターだわ。」とか「シシカブーがいる。」などと言ってみんなを笑わせる。

やがて都蘭、ほこりっぽいテント生活のあとでは、招待所でもうれしいものだ。しかしお湯は出ないしチョロチョロの水も止まってしまう……。

7月8日 都蘭—格尔木

格尔木への道は行けども行けども不毛の砂漠ばかりで、ひとすじの道は地平線の彼方までのびている。単調な景色で車の中でほとんど寝てばかりだった。午後3時20分ホテルに到着した。夜10時やっとお湯がでて久しぶりに頭を洗えてサッパリとする。

7月9日

高度順化のため車で崑崙山峠まで行く。途中に硬源水というのがある。初めの一滴が15年前に生まれて、崑崙の山中をずーっと流れて、ここで地

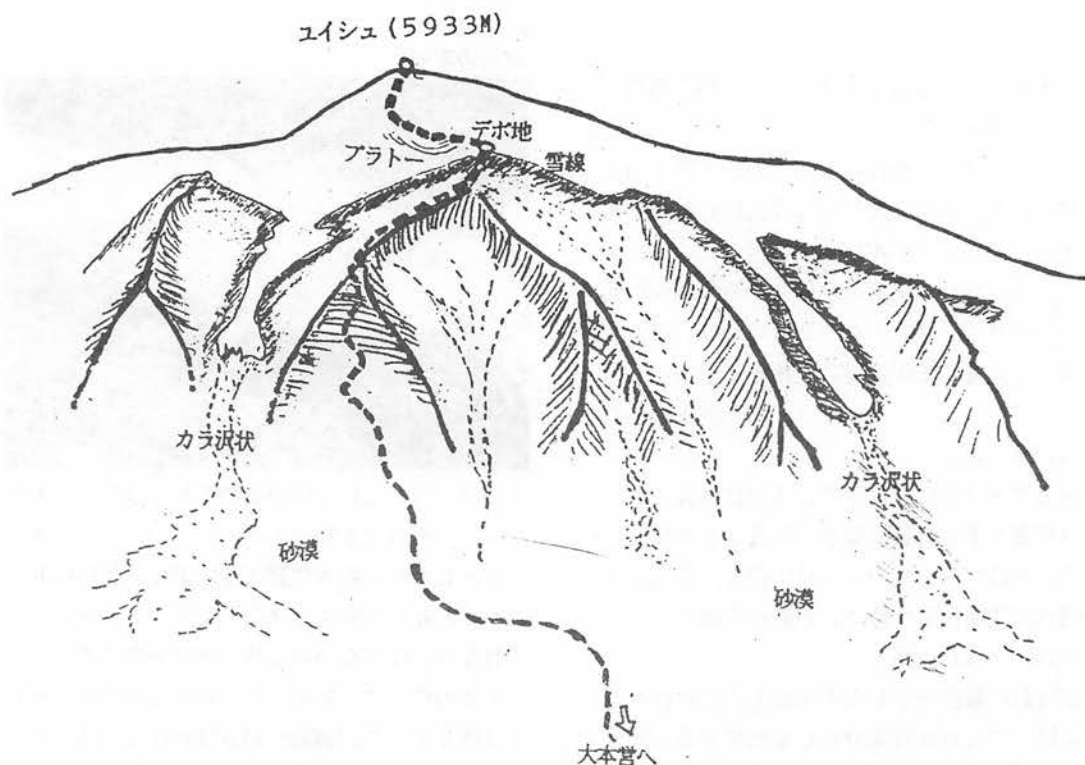
上にあふれてきているところだ。青蔵公路を行き交う人々はみなここで喉をうるおしていく。ラサまではまだ1,000キロ以上もあるのだから……。ミネラルウォーターのびん詰め工場があり、大々的に出荷されている。日本流に言えば秩父や谷川岳の名水という感じである。

西大灘^{シータータン}まで上がると玉珠峰の北面が見えてくる。標高3,500mくらいの広い広い高原状のところだ。昼食後峠へは更にゆるやかに高度を上げていく。

五体投地の礼拝をしながらラサまで行くという女性に出合った。西寧のタール寺から来たとのこと、1年2ヵ月以上も前のことだという。車の旅でも数日かかるというのに、彼女はにこやかに笑っていた。また砂金採りの人たちが耕運機のような車に荷を積んで行き交う。

崑崙山峠は標高4,760mで一帯は大きな盆地状になっている。昨日通ってきたツァイダムの盆地とここからラサへ続くチベット高原とを分ける峠なのだ。右側のゆるやかな丘に100mほど上がり、ふり返れば玉珠峰のきれいな姿が目に入る。しかし残念ながら我々が目指す玉虚峰は雲の中に隠れていて見えなかった。明日はいよいよB C入りだ。

登山活動



7月10日 格尔木—BC

10時30分出発で、昨日と同じく西大滩で昼食後崑崙山峠へ向かう。そこから少し先で左の草原の中を行くと玉珠峰のBCだが、私たちはゆるやかな山なみの間をぬうような青藏公路を更に30キロくらい進む。右手の草原の中に車をのり入ると、正面はるかに目指す玉虚峰が望める。ロバやヤクが疾走している。

平らにみえる草原もけっこう凸凹があり、車輪が埋まると引き上げるのが大変だ。中国側隊員が乗っているトラックは、私たちの乗っているパジェロと違い、何度も車輪が砂に沈み、ワイヤーで引き上げ作業をする。王さんは公路から約2時間でBCに着くと言っていたが、何と5時間半もかかってしまった。しかしそんな奥まで砂金採りの人たちのテントがあるのにも驚いた。

夜8時30分すぎやっとBC予定地に到着、私は車酔いと空腹でフラフラになってしまった。その夜は特に寒くてなかなか寝つかれなかった。やはり5,000mまで上がると冷えるのか——。

7月11日 偵察

昨夜遅かったのでみんなゆっくりと寝ていた。やっとBC入りしたなあ、と思いながら荷の整理をして遅い朝食をとる。今日は偵察と足ならしを

かねて5,500mくらいまで上がってみる。ゆっくりなので疲れはしないが、山の大きさの感覚がつかみにくい。玉虚峰は真っ白でゆるやかな峰に見えるが……。

寺沢さんと樊さんとでルートのとり方に意見の違いがある。中国側の隊員は、樊さん以外は2人とも若くて体力はあるが(22才)、山には全くの素人なので、それに配慮したためだろうか。私は寺沢さんの意見に賛成だが。

7月12日 偵察

11時20分出発。上部の偵察とルート工作のためのフィックス・ロープを2本、スノーバー4本、赤旗竿などを持つ。ザイルは中国側・日本側とも各1本を用意する。

沢ぞいのガレ場をゆるく登っていくと、可愛い雪蓮の花がところどころに見られる。昨日偵察で登った対岸の山が小山に見えるあたりで雪線になった。BCから約2時間30分のここで、みんな靴をはきかえ、ハーネス、アイゼンをつける。

日本側・中国側に別れてザイルをつけ、コンテナンスでゆるやかな雪面を上っていく。午後の雪は軟らかくて歩きにくい。ザイルも不要と思うが、中国側に敬意を表して一応つけた。靴・アイゼン・ザックなど日本側と較べて装備がかなり

違うことが分る。赤旗竿を立てながら約1時間上がって、引き返した。

早立ちすればC1を作らなくても、1日で頂上往復は可能との結論に達した。登頂に必要なアイゼン、ピッケル、ザイルなどは雪線のところにデポしておき、BCへ戻る。全体にゆるやかな斜面なので多分フィックス・ロープもいらないだろう。明日は十分休養して明後日に登頂する予定だ。

(記：沢田幸子)

7月13日 休養

明日の ATTACK にそなえて、本日は休養。中国側は昨夜遅くまで麻雀に興じ、昼近くまで寝ていた様子。2日間の偵察中に、日中双方の登山方法の相違点が認識出来たので、対応策を練る。

7月14日 BC↔頂上

早朝行動に難色を示した中国側も今朝は我々の意見に従ってくれ6時05分BCを出発する。30分程進んだところで寺沢がカメラを入れ忘れた事に気付く、大急ぎでBCを往復する。その間に皆は朝のお務めに勤しんだ様子。

朝から38.7℃の熱を出している中国側隊員の ATTACK に関して総隊長と話し合ったが全く耳を貸してくれず、日本側は秘かに最悪の場合を想定して余分に登攀具類をザックに忍ばせる。黒馬河での順応訓練が功を奏しており、皆日本の山にいるのと変わりが無い程好調なので頼もしい。

途中幾度かの小休止をし、デポ地点で1時間程休憩し、靴をはき替えて出発準備をする。総隊長の指示に従って我々も4人でアンザイレンしたもの、防寒着すらデポして先行する中国側に皆啞然とする。偵察時に見せていた総隊長の慎重さ振りからすると考えられないことだが、きっとそれだけ自信があるのだろう。

粗末な靴の彼女達は偵察時もそうであったが、直ぐに濡れてきて足が冷たいのだろう決して休もうとはしない。後続の我々を足踏みしながら待つのみである。C1建設を中止した最大の理由も実はここにあった。

スキー滑降に理想的な雪面をデポ地点からのんびる登ること2時間50分、12時20分広い頂上の一 corner で玉珠峰と同型の鉄塔が我々を待っていた。嬉しさにはしゃいでいる中国側隊員に合わせている

氷河の末端



ものの、醒めていく己の気持ちはどうしようもなかった。それでも気を取り直してパノラマを楽しむとしたが、寒さに震える中国側隊員に防寒具を与え、先に下降する様伝えても全く聞き入れてくれない。仕方ないので皆一緒に下降する。

デポ地点まで一気に下り、靴をはき替え、BCを目指して下る。総隊長は心に想うところ大であったのだろう、終始無言である。己が彼女の立場にあったらと思うと、心中察するには余りある。

16時30分全員BCに帰着。茶を飲み一息入れていると、我々の帰幕を待っていたかの様な強風と多量のアラレが降り始めた。

7月15日 BC

疲れも無いので午後一番で共同装備の梱包を終える。終えた直後から昨日同様強風とアラレに見舞われる。

どうやら悪天周期に入った様子。地面の状態の良いうちに公路沿いに出る事にする。

帰路

7月16日 BC-格尔木

本日は納赤台の先まで行こうとの事だったが、朝中国側の若い2人の隊員の体調が思わしくない。強引に日本側のパジェロに2人を引き取り、あまりにむくみのひどい隊員には利尿剤を投与する。幕営予定地に着く頃には回復していたものの、もう1人も当初虫垂炎を思わせる程の腹痛を訴えていたため、強引に格尔木まで下りることにする。規則で予定外には投宿できないとの事で、暑い郊外でテント生活となる。虫がすごい。

7月17日 格尔木

虫の見本市の様なテントの中、今朝目醒めると



テントの天井一杯ピンクのウジ虫がはりついている。沢田はこの日からどういうわけか虫になつかれてしまった様で、時々悲鳴をあげていた。

午後見物に行った観光用ゲルで、下戸の寺沢は微量のアルコールで敢えなくダウン。心やさしい隊員達は、この夜如何にして隊長への酒の推めをかわすか相談したらしい。感謝に耐えない。

7月18日 格尔木

ようやくホテルへ。しかし観光シーズンが始まり、イルミネーション設置のため停電で電話もファックスも不可。ようやく日本へ電話がつながったのは、とっぷりと夜が更けてからであった。因に、格尔木からの国際電話は西寧経由となるためずい分割高になる。

(記：寺沢玲子)

7月19日 格尔木—都蘭

ヤク乳、肉まん等の美味しい朝食後、10時15分格尔木賓館を出発する。気温は40℃近い。車の中で座っているだけで背中に汗をかいてくる。暑さにグッタリしながら、砂漠を延々とジープで東に向かう。16時50分都蘭招待所に到着。今日は皆で泊まる最後の夜ということで、樊綏隊長、寺沢隊長の挨拶のあと、皆でビールで乾杯。歌も出てくる。続いて樊綏隊長の部屋で2次会。市川隊員の

「大きな栗の木の下で」が、大好評だった。

7月20日 都蘭—西寧

9時05分都蘭招待所を出発。茶卡塩湖を越え、4泊した、なつかしい黒馬河のテント場を過ぎる。その時よりも、ずっと緑が増え、色とりどりの花が咲きほこっている。草を喰む羊の数も多く、いかにもチベットの草原という感じである。橡皮山峠で運転手の李さんが車を止め、反対側から来る車の運転手と、立ち話を始めた。相手の車から初老の紳士がおりてきて、日本語で我々に話しかけてきて、我々はビックリ。福岡県柳川市の出身で単身、西寧に来て、青海大学で日本語を教えているという。偶然の出会いを喜ぶ。昼食後、青い青海湖をバックに、目にまぶしいほど黄色い菜の花の花畑とピンクの花々の色のコントラストに感激しながら、いよいよキャラバンの終わり西寧に向かう。19時10分西寧の青海賓館に着く。青海省登山協会の方々が隊員ひとりひとりに花束を渡し、迎えてくれる。夕食は、隊員11名で市内の食堂です。それぞれTシャツ等にサインをし合い、楽しい最後の交流のひとときを過ごす。

7月21日 西寧

青海省登山協会ではデポ品の整理後、タール寺見物に出かける。観光客が多く、まるで京都のお寺



のようだ。その中、チベット人の女性が、敬虔に祈りながら寺を巡っていたのが印象的であった。18時30分中国側の隊員、スタッフを含む登山協会の方々、青海省体育協会の李軍氏を招き答礼会を行なう。青海省登山協会から登頂証明書をいただく。

7月22日 西寧ー北京

登山協会に寄って、記念撮影の後、空港へ向かう。22日間一緒に過ごした中国側メンバー7人と別れを惜しむ。全員、とても気持ちのいい人たちで、お蔭様で楽しい思い出の残る22日間を過ごせた。謝々!! 我々がこれから乗る飛行機で、玉珠峰隊が西寧に到着し、酒井隊長、森山隊員と会い話をする事ができた。12時40分離陸。14時30分北京着。中国登山協会の方が迎えに来てくれた。北京はやはり都会で、「帰ってきてしまった…」と、青海省の広い砂漠がなつかしく思い出される。行きと同じ天橋賓館に泊まる。

7月23日 北京

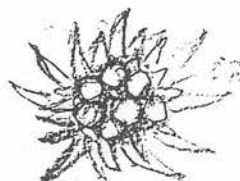
皆、連日のビッシリ・スケジュールにより疲れぎみのため、万里の長城行きはやめ、今度の機会にとっておくこととする。午前中は、通訳嬢の紹介で、中国美術館で墨絵を鑑賞し、現代中国美術の一端に触れる。午後は、友誼商店で土産品の買

い物をする。4人でシルクの下着などをまとめ買いし値切る。夕食は、中国登山協会のスタッフと豪華な中国料理をいただく。今回は、全般的に食事がおいしく、4人ともやせずに日本に帰れた。むしろ、寺沢、辻野は太ったといった方がいいかもしれない。

7月24日 北京ー成田

5時30分起床。北京は今日も天気がいい。この時刻で既に24℃である。今回の遠征は、天候が大きくくずれることもなく、非常に天候に恵まれたといっているかもしれない。早々に出発の準備をする。登山協会の陳尚仁氏に出発手続をしていただき、助かる。9時20分離陸。14時成田着。空港で、また会うことを約束して解散する。

(記：辻野治子)



1994.7/13 BC : 雪蓮のつぼみ(藍色の花が咲く)
隊長は BC 上部の氷河湖畔 白の雪蓮を見つけた!

寺沢 玲子

この度の涉外関係は、その殆どを事務局の山森欣一氏の手を煩わせて戴いた事を、先ず記しておきたい。

1月14日、かねてから打診されていた合同登山への合意を了承する旨青海省登山協会(以下QMA)へ連絡をいれ、1月31日、合意のFAXをいただいた。その中で請求された登山料はUS\$ 500、撮影料も同額のUS\$ 500であった。

この段階では、玉虚峰はすでにアメリカ隊が登頂したと云われていたため、我々としては登山規則により1人US\$ 30×4人=US\$ 120と考えていたので再度確認したところ、2月19日、6000m未満の未踏峰の特別登録料US\$ 2700~US\$ 8100の最低基準額としてUS\$ 2700の請求が届いた。これに対して2月24日、我々4名は全て自費で行う登山であるのでこの様に法外な登山料では登山隊派遣は不可能である事、QMAとの友好親善のための登山である事を訴えたところ、3月11日付のFAXで玉虚峰は確実に未踏である事、青海省初の日中女性合同登山を是非とも実現したいので特別登録料は特惠価としてUS\$ 1000とする、議定書は直接QMAと交換する事との回答が届いた。

HAIJでは通常議定書は中国登山協会(以下CMA)と交換しているが、今回の登山隊はQMAとの友好親善隊であること、規模が小さいことなどから、3月15日QMAと直接議定書を交換することをCMAへ連絡した。

尚、撮影料は特別配慮により無料となったので、ビデオカメラを持参することにした。



中国の賓館は待所に
置かれているお茶壺。
必ずフタ付である。

装備

寺沢 玲子

場所的に考えて山容はおそらくなだらかであろうし、気温も日本の春山程度であろうと想定し、特別に用意した装備はない。

＜共同装備＞

BC用の全装備並びに通信用具は中国側で用意し、C1用装備並びに登攀用具それに医療用酸素は日本側で用意することにした。実際にはC1は出さずに終わったため、持参したC1用装備はプラパールに保管されたまま日本側のBCテント内で風避けの壁の役割を果たしただけであった。

登攀用具も実際に使用したのはアンザイレン用のダイニーマロープ 1本とアタック用に持参したフィックスロープ 1本それに標識用の赤布付竹竿20本で済んだ。一番心配したのはヒドウン・クレヴァスの有無だったがそれも無く、日本の東北の春山を闊歩している様であった。

＜個人装備＞

個人装備に関しても、日本の春山を想定し、特別な準備はしなかった。ただし、ヘッドランプだけはその持続時間やバッテリーの重量を考慮して、全員リチウムバッテリーの使用できるベツル製品を用意した。

BCでの気温は最高は 40℃を上回り最低は -7℃を記録したが、全員の体感温度としてはそれほどの冷えを感じず、インナーシュラフで充分事足りた。

ただ、中国側の持参した装備は総じて貧弱だったため、雪上ではすぐに足が濡れ、必要以上に寒さを感じていた様で気の毒であった。目指した山が低かった故の判断ミスなのか、天候に恵まれたから良かったものの少々考えさせられた。

全般的に見て、とりたてて良かった点もなかったが、悪かった点も無かった様と思う。

タクティクス

寺沢 玲子

当初は日本側4名中国側4名の計8名で立案し、基本的には2次に分かれて全員登頂を目指すこととした。勿論山容その他如何によつては全員同時アタックも考えることにする。また、合同隊の条件としては同一パーティには両国隊員が入っていないなければならないとの事である。

登山活動期間がわずか1週間と短い割りにはBC予定地の標高が4900mから5100mと高いので、入山前の順応を徹底的に行うことにした。

実際には、3000m台後半の標高の黒馬河周辺で4泊テント生活をし、初期の順応が出来た為、登山活動そのものはあつけないほど順調であつた。

食料

辻野 治子

BCまでの食料は中国側が用意し、BCから上の食料を日本側が用意することになっていたのので、日本からは、登山活動中の行動食、C1の食料、及びBCでの嗜好品を用意した。

行動食はビスケット、ゼリー、ドライフルーツ、あめなど、軽量で保存性のあるもの、そして、中国側メンバーの口にもあいそうなものと考えた。用意した時には、まだ、中国側メンバーの人数がはっきりせず、8人分×7日分用意した。しかし、行ってみると、中国側も行動食を用意してくれていて、結果的にだいぶ余つた。中国側メンバーには日本のビスケット、ゼリーが好評だった。日本側メンバーには中国のヤクの干し肉が好評だった。

C1食はアルファ米、ジフィーズ、おかず、スープ類を主体に2泊×8人分用意したが、C1は建設しなかつたので、登頂祝いにアルファ米とすし太郎を使った以外は全く、使わなかつた。

BCでの嗜好品は、飲料類、特に紅茶、コンデンス・ミルク、ポカリ・スエット等がよく利用された。また、せんべい、水ようかんが好評だった。

医療

寺沢 玲子

今回は、健康や体調の自己管理、不調の時の自己申告を原則とし、敢えて係から積極的に働きかけはしなかった。これは、今回のメンバーがお互いに気心の知れている事、比較的年齢が高く誰も無理はしそうな事などから、そう神経質にならなくても大丈夫であろうとの思いからである。実際には体調チェック表を各自に配布し、毎朝全員の体温・脈拍・些細な不調でもお互い体調を申告してもらい、不調イコール肩身が狭いとは感じない隊の雰囲気を保った。

高所順応のため4泊した黒馬河付近約3,500mでは、頭痛や歯痛に悩まされ鎮痛剤の世話になる者もいたが、大事に至る事はなかった。BC入りした日は、疲労からか倒れた隊員や頭痛を訴えた隊員もいたが、それ以降体調を崩すこともなく、皆快調であった。

BC撤収の日、一中国側隊員が熱とひどいむくみ、腹部の激痛を訴えた。前夜からだったと云う事であったが、自国の医学以外への拒否からか、我々の目に触れさせないようにされていたため、気付いた時には風船のようにパンパンにむくんでいた。生理痛とそれに誘発された高度障害のためと思われるが、40℃を超える暑さの中でも身体が冷える、と果物や水分の摂取を禁じられていたとの事。中国側とかなり話し合ったが、まったく耳を貸してもらえず、半ば強引に我々サイドに引き取り、半量の利尿剤を与えたところ、数時間でむくみも生理痛もとれた。女性ならではの問題である為、年若い中国側隊員にとっては、最終的には男性の通訳を解さなければ説明できなかった事は、精神的にかなり抵抗もあった事だろう。普段はあまり感じる事のない合同隊の難しさを考えさせられた出来事だった。

使用した薬品は下記の通りである。

鎮痛剤:バファリン 32錠、ポンタール 12錠、総合感冒薬:PL顆粒 5袋、
胃腸薬:センロック 20錠、サクロン 5袋、緩下剤:大甘丸 10錠、
利尿剤:ダイアモックス 1/2錠、
その他:マキロン、滅菌ガーゼ 5枚、サビオ類 40枚、

梱包と輸送

沢田 幸子

1. 梱包について

食糧は、北海道で準備したものを東京のH A J事務所で、在京の寺沢と沢田でブラパールに詰める。

装備・他は、青海省登山協会にデポしてあるH A Jの品物で不足する分を、食糧と同様にブラパールに詰める。

2. 輸送について

西寧からB Cまで、2台の車に隊員と隊荷をのせて行く。特に問題はなし。

Take in, Take out の実践

沢田 幸子

1. Take in について

当然のことながら、食糧品、他すべて、可能な限り外装をとりはずして持参した。

2. Take out について

今回はB Cまで車で入れたし、C 1の建設も不要だったので、B Cでのみ注意した。

- ・ 燃えるゴミ ----- 燃やした
- ・ 生ゴミ ----- 土中に埋めた
- ・ 燃えないもの ----- 空ビン他、町までおろす
- ・ トイレの後始末 --- 場所を指定し、下山日に埋めた。紙類は燃やした

B C滞在5日間という短期間だったので、処分するものも、持ち帰るものも、たいして苦にならず、中国側スタッフも理解して協力してくれた。



遥かに続くチベット高原を背にビデオ撮影をする



ゴミを燃やす通訳の王さん

記録

市川 春代

今回の遠征は、片手に収まる小型のビデオを使用した。撮影に不慣れだったので、映像にムラがあり、編集段階で無駄になる部分が多いように感じた。事前に撮影のテクニックを習得すべきであった。ビデオの一部がNHKのローカル番組（TV）で放送された。

カメラは各自、持参したが、望遠レンズを持って行かなかったのも、山脈全容のダイナミックさを撮ることができなかった。遠征前の打合せで確認すべきであった。

気象

辻野 治子

記録の少ない山域に入ったのだから、もう少しまめに記録をとればよかった。気温は8:00、13:00、19:00と3回記録することにしたが、13:00は行動中ということもあり、ほとんど13:00の記録はとるのを忘れてしまい反省している。

この短い期間での傾向としては、一日の気温の日較差が非常に大きく（砂漠気候のような感じ）、夕方から雲がわき、風が出てくることが多かった（時には雨やひょうが降ってくることもあった）。しかし、昼間の天気だけで考えれば、晴れの日が結構、続いた。

毎日の気象状況は以下の表のとうりであった。

<毎日の気象>

月日	行 動 範 囲	天 気	気 温 (°C)			
			最 低	最 高	8:00	16:00
7. 2	西寧	①		2. 3		
3	西寧～黒馬河	①	7. 8	32. 0		
4	黒馬河	①	2. 3	30. 6		
5	黒馬河	①→●	8. 8	39. 9		
6	黒馬河	①→●	3. 0	6. 8		4. 2
7	黒馬河～都蘭	◎	1. 8	26. 8	11. 6	16. 0
8	都蘭～格尔木	◎→①	7. 6	30. 6	10. 7	23. 8
9	格尔木	◎→●	7. 5	29. 6	12. 8	15. 9
10	格尔木～BC	①	11. 7	29. 4	13. 3	
11	BC	①	-6. 7	26. 6	8. 4	6. 9
12	BC	①	-6. 9	40. 2	30. 8	15. 4
13	BC	①	0. 4	40. 1	36. 2	16. 5
14	BC～頂上～BC	①→●	1. 1	36. 0	3. 0	8. 0
15	BC	①→●	-0. 2	29. 8	18. 9	3. 7
16	BC～格尔木	①	-1. 0	39. 3	38. 3	
17	格尔木	①	13. 2	39. 6	16. 4	11. 6
18	格尔木	①	7. 5	42. 0	18. 1	24. 7
19	格尔木～都蘭	①	19. 1	39. 8	20. 3	
20	都蘭～西寧	①	20. 0	35. 7	21. 9	
21	西寧	①→◎			24. 4	
22	西寧～北京	①				
23	北京	①		34. 1	25. 3	31. 1

未踏のはずの聖山の頂上には鉄塔がしっかりと設置されてあった…。正直なところ、予期していたとは云え落胆した。初めての登山でその頂上を極め、無邪気に悦んでいる中国側隊員や通訳の王氏の気持ちを思い、一緒に悦びのポーズをとってはみるものの、醒めていく己の気持ちはどうしようもなかった。

それは私だけではなく、日本側の隊員達も同様であったようだ。登行時は中国側の指示に従ってロープを組んではいたが、下降は皆各自のペースで下り始めた。テラさん、私等だけでも樊さんを最後まで立ててやろうよ、辻野の呼び掛けに私はハッとした。頂上に到達してから樊さんは1人何か考え込んでいるようだった。登山活動を開始して以来我々に気を使うあまり、我々を完全に客人扱いすることへの不満から私までがロープを解いてしまったなら樊さんの立場がなくなってしまう…。歳若い辻野に悟された思いだった。

話は少々横に逸れるが、1985年日本山岳会カカサイジモンカ(=玉珠峰と云われていたが、1994年青海省登山協会は異なる山との見解を発表)登山隊も同様に、未踏峰としての許可で登頂した折に頂上で同型の鉄塔に出迎えられている。当時その問題に関して、中国登山協会から『標高6、500m以下の山については登頂記録の有無を登山協会としては必ずしも正確に把握しきれない場合も有りうる』との事情説明があったとの事である(「山岳」NO.81~1986年~日本山岳会中国登山隊1985報告)。

この鉄塔問題については、樊さんは我々より深く傷ついていた。恐らく軍が測量のために設置したものと思われるが、己が信じてきたものに裏切られた思いと我々に対する申し訳の無さで身体中の血が引く思いだったと後述していた樊さんの姿に、なによりも軍事が優先されていた時代の中で生きていく事の辛さを垣間見た様な気がした。

軍事優先と云えば、登山終了後にモンゴル族の観光用パオを見学に行った時の事。日本人と知って私に杯を薦めてきたモンゴル族の男性がいた。最初は丁重に辞退していたのだが、話が満州事変に及び、お互いの

親の忌まわしい時代を強い口調で語られ始めた時、聞き役に徹していた私は何故かそれ以上断りきれずに白酒の杯を手に使っていた。それを口にしたら己がどうなるかがチラリと脳裏をかすめたが、そうせざるを得ない理由の分からぬ罪悪感を覚えていた。後日、通訳の王氏に聞いたところによると、彼を交えて樊さんと件の男性と私は、過去に不幸な時代があった事を忘れることなく、今後は二度とあのような時代が来ないようにと、それぞれの国の歌を唄ったとの事。当然ながら全く記憶がないのだが、沢田に下戸の身の程を弁えずホントウにバカネ！と言われた事だけが心に残っている。他人に言われるまでもなく、我ながらあまり賢くない行動だったと思う反面、自己満足かも知れないがあれはあれで良かったと今でも思っている。

別れの日、樊さんが相も変わらぬ笑顔で語った。寺沢先生、男性の方が女性より強いわけでも女性の方が男性より偉いわけでもない、天は男性と女性とが共に半分ずつ支えていると思いませんか。1991年冬、樊さんに絡んだ件の日本人男性の事を樊さんはしっかりと覚えていた。樊さんの人柄に魅せられていた私は、この一言でますます彼女が好きになった。と同時に、樊さんのような懐の広さを持さねば、と思い知らされた。

異国での登山とは不思議なものである。登攀要素が強く充実した登山をしても人に恵まれないとそのおもしろさが半減してしまうし、反対に日本の延長の様なあまり緊張感のない登山でも人に恵まれればとても印象深いものとなる。この度の合同登山隊は真に後者の代表的見本の様な登山隊であった。総隊長や両国隊員そして通訳を始めとするスタッフにも恵まれた、幸運な登山隊だったように思う。

勿論何の問題もなかったわけではない。未踏峰として払い込んだ登録料の件については、青海省登山協会からはその後何の音沙汰もない。登山そのものの考え方も全く異なるし、それ故生じる誤解や反発も当然ある。その度に通訳の王氏には仕事とは云え辛い思いをさせてしまった。王氏には心から感謝している。

今回の立役者の市川春代と辻野治子を中心となって、近い将来同じ青海省の名峰各拉丹冬雪山(グラタンドン・シュエシャン6,621m)を舞台に、女性登山隊を計画していると聞く。素晴らしい仲間と出会い、心に残る登山が実現することを願っている。

登頂記

沢田幸子

7月14日いよいよ登頂日だ。中国側のスタッフは朝が遅い。BCでもなかなか日が暮れず夜も10時すぎないと暗くならないので、寝るのはいつも12時すぎになる。だから今日だけは早く出発したい、という私達の主張も、すんなりと受け入れられなかった。C1建設を省略するからにはせめて足もとが見えるようになったら出発したいと思った。いくら日が長いといっても、午後になれば雲がわき風もでてくる。

6時過ぎ出発し、デボ地まで皆黙々と歩く。市川さんが一生懸命ビデオを撮ってくれる。痧^{イシ}さんはBCを出る時から空身なのになるそう。少し顔がむくんでおり熱もある。単なる疲れではなく高山病だと思うが樊^{メイトン}さんは「没关系」という。

デボ地で靴をはきかえ身仕度を整える。厚化粧の方も怠りなく……。私たち日本側メンバーは、ツェルトをはじめ念のためフィックス・ロープ2本、スノーバー4本、アイス・ハーケン、コンロ等を持った。それにスベアの防寒具、行動食、カメラなどが加わり、4人ともザックを背にしている。寺沢さんをはじめ皆優しく、私に金目のもの（重たい物）を持たせてくれないので、私の荷はフィックス・ロープ1本とHAJの旗が入っているだけで軽い。

しかし、中国側は行動食をはじめすべてデボ地に置いて空身である。通訳の王さんのみがカメラとトランシーバーを持っている。一応ハーネス、アイゼンをつけピッケルを持ってザイルを結んでいるが、その身軽



玉虚峰南面

さを見て私たちはとまどってしまった。靴だってあまり保温性が良いとは思えない。

なだらかな雪の斜面でザイルをつなぐのは、かえって煩わしいと私たちは思っているが、寺沢さんの「友好第一」のことばに、一応同じスタイルにした。空身の中国側が先行する。荷を背負いビデオを撮りながらなので、私たちは遅れぎみだ。私はビッケルを背中にさしたまま、スキー用のストックで頂上まで間に合ってしまった。そしてついに未登か否かと疑わしいのが確認された。

山頂には鉄塔が立っていた！玉珠峰の例もあるし何となく予感はしていた。そして人間ってぜいたくなもので、登ってしまってから（あっけなかったなあ……）なんて思ってしまう。

記念写真を撮り合い、ゆっくりしていたかったが、中国側は寒さにふるえていて早く降りようという。予備の防寒具をとりだし中国側に使ってもらおう。少し風はあるが私たちはヤッケに身をつつみ冷たさを感じない。素手でもカメラの操作ができるくらいだ。

崑崙山峠の向こうに真っ白い玉珠峰がよく見える。インドのヌン峰にちょっと似ている山容だ。新青峰は雲の中で見定めることができなかった。チベット高原の果てに少しだけ白く見えるのは、各^{グランドン}拉丹冬峰6,621mらしい。樊さんが次の女性合同登山にどうですかと提案してきた山だ。技術的にそれほど難しくはないとのこと、日中の友好がより深まるならば、ヒマラヤの第7級の登山にも劣らない良い登山となることだろう。

しかし合同というのは楽しみと気苦労が背中合わせなことである。特に隊長にとっては――。ルートの選び方やルート工作そして装備の内容など、今回の登山でもくいちがいはあった。とにかく友好第一と中国側の意見をなるべく尊重するようにしてきた。でも厳しい山になれば、そうそう引っこんでばかりもいられない。人命にかかわることになればなおさらだ。真の友好のための合同登山なら、こちらも同等に意見を出しての話し合いが行われてしかるべきだと思う。

今日の彦さんのようすは、もし私だったら登るのをみあわせたし、寺沢隊長も同意見だと思う。中国側の事情では簡単にあきらめるわけにはいかないのだろうか。

16時BCに戻り一服していると夕立になり、雷雨、あられとなってきた。早目の登山で本当にラッキーだったと思う。

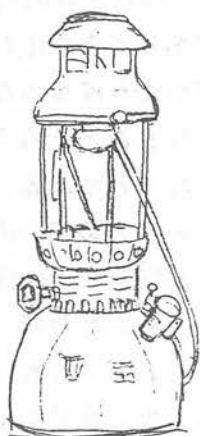
それにしても若いころには考えもしなかったことが実現した。ヒマラヤがまだ海だった何百億年前の昔から存在していた崑崙山脈へ、このよ

うなすばらしい仲間たち——ダイヤモンドのような仲間と一緒に登ることができたのだから。

子育てに追われていた30~40代には夢にも考えられなかったことである。子供らの成長とともに子づれハイキングに何度も行った。しかし3人とも成人してからは、私も子離れして山岳会に入り山歩きを続けていた。そして訪れたヒマラヤへのチャンスだ。話があるたびに違う国へ、インド、台湾、パキスタンそして今回の中国へと、山の世界が広がり、いろいろな人とのつながりが増えていくのがうれしい。

ぜひまたどうぞ、との熱烈ラブコールには別れがたいものを感じた。「老いて学べば、死して朽ちず」とのことばもある。私はまだまだ山にも、人生からも学ぶことが沢山あるのだから、夢を見つづけていれば、またいつか実現するかもしれない……。

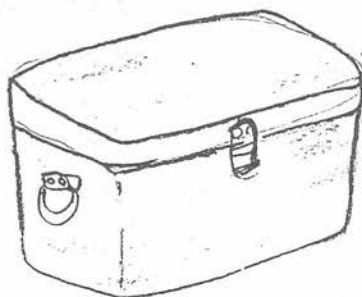
寺沢さんはじめ同行してくださったかたがたに感謝の気持ちでいっぱいです。



食テントいも
ミミササキ
カサランテ
旺々な光を放つ。



BCい
大さじの
万能中華鍋
ほいほいの料理
をこいこいまか
なつた。中身は
どうがし(青)の
いためたもの。
とちとちカライ!



中国側の太さな
ブリキの保存箱。
(行動食やButterが
入っていた)

再び崑崙山脈で

市川春代

1985年に国際婦人年を記念して編成された日中友好女子登山隊に参加し、新疆ウイグル自治区・西部崑崙山脈の無名峰5,850mに登頂した時は数年後に再び、“地球の背骨”といわれている2,000キロにも及ぶ長大な崑崙山脈の、しかも青海省・東部の峰に、またしても、日中合同女子隊で登頂できるとは夢にも思わなかった。

何年かぶりのこの遠征は、自分が悠々とした時の流れのなかのただの点にすぎないこと、大きな空間のなかのただの浮遊物にすぎないことを改めて感じさせた。そして、年齢を重ねたせいもあるのか、気心の知れた仲間と一緒にだったという安心感もあったのか、人との出会いを大切にしようという思いが残った。

——— 崑崙路で ———

私達は、青海省・西寧と西藏自治区・拉薩を結ぶ幹線道路—青蔵公路—沿いに高度順化をはかりながら、10日間かけてBCに入った。ゴルムドからBCへ向かう崑崙山口4,837mの手前で、五体投地をしている女性の巡礼者に会った。五体投地は、地面にひれ伏して、仏に自分のすべてを捧げる祈りの姿で、人間が地上を進む方法として最も遅い部類に属するといわれている。30才後半と思われるその女性は、10才ぐらいの男の子と一緒にあった。彼女は西寧のタール寺を出発してから1年2ヶ月で、私達が車で3、4日間で来たこの同じ地点に立ち、これから2~3年かけて拉薩へ向かうという。五体投地をしている巡礼者の姿はTVの取材番組や本で見たことはあったが、現実と接するとことばが出てこなかった。何か腹の底から揺り動かされるものを感じ、強烈なできごととして私の内に残った。西寧から車で8~10日間もあれば拉薩へ行けることを聞くと、彼女の旅は途方もなく長いように感ずるが、それをしていること自体が幸福なのだと思う。彼女は、何かを包み込むようないい顔をしていた。

——— 草原の峠で ———

私達が全員登頂を終え、西寧へ戻る2週間の間に、草原は緑濃く、花々が咲き、放牧されている羊がのんびりと草を食み、あちこちに遊牧民（チベット族）のテントが点在していた。

峠を下りる私達を乗せたジープは、対向してくるジープを見て止まった。運転手同士が知り合いで彼等が懐かしそうに話をしていると、相手

方のジープから、タンガリーシャツにジーンズ姿の初老の男性が降り、話しかけてきた。青海大学で日本語を教えている近藤藤利氏である。近藤先生は、日焼けし、生き生きとした表情で「この地の人達は、人が良くて気持ちが暖かい。近い将来、西寧にも日中の合弁会社が設立されるだろう、日本の商社マンに負けない日本語を教えたい。」と語り、とても63才とは思えなかった。

そのあと、近藤先生からの手紙で、中学校の国語の教師を40年間、その後、盲学校で2年4ヶ月勤めてから中国へ行ったこと、親しい友人達へ中国での生活のようすを〈遙か西“青海”より東方へ〉という題で書き送っていることを知った。この〈遙か西“青海”より東方へ〉には、近藤先生が女子学生からダンスの手ほどきを受けるようす、風邪で寝込んでいる時に学生が親切に介抱してくれたこと、羊を一頭丸ごともらったこと、そしてその解体を学生に頼んだことや、日本語を全く知らない学生が日本語を覚えていく姿に感動していることなどが綴られ、一日一日を大切に生きている姿が伝わってくる。

「人生は情熱です」と言う近藤先生との出会いは、人生は年齢ではなく、どう生きるかであることを強く感じさせるものとなった。人間が生きている間に、知り得るものは限られている。だから、自分の微々たる可能性（無に等しいが）を、最大限に試みようと思う。

7月中旬、私達は群青色の青海省を後にした。

近藤先生からの〈遙か西“青海”より東方へ〉で、その後の青海省・西寧のようす、そして何よりも近藤先生の意を、伝えたいと思う。

遙か西“青海”より東方へ

青海大学 小島研修中心 日本語専攻 近藤藤利

No.9 (1994.10.12)

9月5日はいいよ前期の初日。どの目も輝いています。少し日本語が分かる学生もいたので何から学習しましょうかと言うと、やはり挨拶からしたいと言うので、渡りに船とさっそく自然に会話の学習にもっていくことができました。この会話の学習と作文それに書写は、去年のカリキュラムにはなかったのですが、今年は強く要求して入れてもらいました。そして、言い出した責任で今年はそれらを担当していますが、これからの一年間が楽しみです。

少し心配していた発音も耳からもらしくすぐきれいになり、褒めると実に喜ぶような顔をします。初日から学生対学生の学習を入れましたが、初心者とそうでない者とを組ませたのかよかったのか、抵抗感もなくうまくいきました。また去年と同じく、教室を日本の教室とし、生活習慣一切を日本と同じにしましょうと言っても、気持ち良く了承してくれました。このようにすべりだしい誠心で、一日目の授業を終えて教室から出て見た花壇の満開のダリヤが輝くように目に飛び入ってきました。

7日は、5月に二十数名の学生たちと一緒に大変お世話になった青海湖の近くの甲乙寄宿学校の彭措校長がみえたので、その時写した生徒達の写真を一人一人に渡してもらうよう百数十枚お願いしました。彭措さんは大変喜ばれ、「7月に卒業した六人には、26キロ離れている者もいますが、一人一人に必ず面会します。」と言ってもらいました。彼と私と同じ63歳ですが、事教育の事となると、いつもひたむきな生き生きとした表情を見せます。 チンク

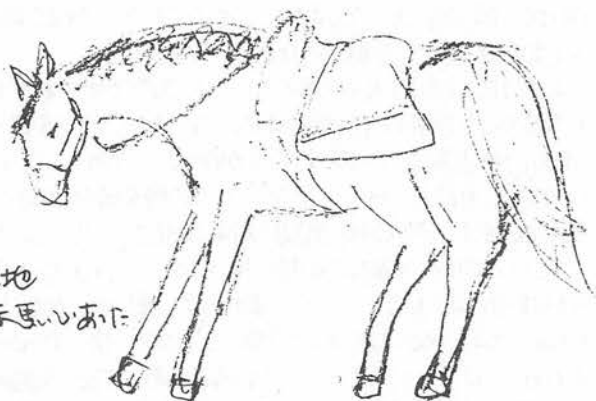
10日、この日は、今ちょうど小麦(15.6年前まではバイチオウ白酒を作る青稞を作っていたそうですが、今は日月山から西のチベット高原の方でしか作っていないということです。)と油菜の収穫の真っ盛りなので、写真を撮りました。共計で機械を使ってやっている農民から昔ながらの棒でたたいて収穫している人達まで様々です。ここにもますます広がる生活レベルの格差が痛々しく感じられました。もちろん私は後者の写真を多く撮って、後で一人一人に上げました。彼らは私の服の袖を引っ張って家に入ってお茶やお酒を飲んでいけよと言って聞かれません。しかし、一軒で飲めば効が大変なので鄭重に断りました。とにかく大学のまわりの農民とは大の仲良しなのです。

12日からは、「しなやかな指づくり」と「ひらかねの書写」とを始めました。珍しいのか幼稚園の子供のように熱中してくれました。こちらの漢字の書写指導が非常に重視しているようでどうしても筆圧の変化がなくて字の味もありません。「筆圧の変化・運筆の緩急・空間の空け方・意連」など指導しましたが、やはり若い学生ほど癖を直すのが早いようです。また、今日はお月に北京の日本文化館からもらってきた「日本紹介ポスター」(大判)も見せましたが、みんな食い入るように見てくれました。なにしろ、言葉は自然・生活・習慣・文化・歴史などをバックにあるのですから、こんな資料は本当に貴重でありたいのです。飛行機の中では持っているのが大変でしたが、持ってきた甲斐がありました。

今朝はもう二重窓の外窓は真っ白です。今少し寒くても頑張って乾布摩擦をつづけることが大切なのです。7時20分が日の出ですが、少し息を強く吐くと白くはっきり見えるようになりました。とにかく夕方まで寒さを感じるようになりました。そして、どうやら農作物の収穫も終わりに近づいたようです。

21日、夕食をとりにくい時はさすがに寒く急ぎ足になりました。食後のおいしいヨーグルトも外の売店で飲むと冷たすぎます。急に冬が近づいて来たようです。しかし、昼間はもう少し暖かく、今日は返り咲きしているケシ・キンセンカ・菊科の花・それに今年最後の蜜をむさぼるミツバチが群れている油菜(春の油菜の収穫はもうほとんど終わりましたか)などを十数枚撮りました。これらの写真はこれからすべてが枯れて茶褐色の世界となる青海省の6月を愚めてくれます。

29日、少し寒く感じましたが、負けじと7時30分の日の出とともにベランダに出たら、屋



BC撮り終りの帰途 ツァイツム盆地
いよいよ放牧民の馬、野馬の馬いふた

根柢根柢は今年初めての初霜が光っていました。乾布摩擦もそこそこに写真を撮りました。本当ここは秋と冬が一緒なのです。

この日から三日間とはとにかく大変忙しい毎日となりました。まずこの日、12時半授業を終ると、学生たちが急に「先生、今日午後2時から英語コースの学生たちと一緒にダンスパーティをしましょう。」と言って来ました。ダンスは去年の12月末に習い始めたばかりで自信は全くありませんでしたが、断る理由はありませんので参加しました。真昼間の明るい所でのダンスも初めてでちょっと恥ずかしい気かしましたが、言葉の学習と同じだと思って、思い切って2時間半ほど全部の女子学生と踊りました。本当にダンスは相手によって一人一人踊る感じが違って楽しいですね。この後、夜7時半から学内で、「慶祝建国四十五周年晚会」があり、ちょっとのぞいたらすぐ見つけ、最前列に席を空けて引っ張っていくのでとうとう座り、最後まで(10時すぎ)見てしまいました。いろんな民族の学生たちがそれぞれの音楽でのびのびと踊り見飽きません。途中、日本語の個人指導をしているモンゴル徳王四代目のお嬢さんの伊麗娜さんが、モンゴルの踊りを華麗に踊って見せました。その後写真を撮ったりしてとうとう10時半を過ぎてしまいました。しかし、快い疲れでした。

10月2日は午後1時すぎ急に暗くなり、寒、風の急にどっと吹きつけて来たかと思うと、珍しく大きな雷鳥と大粒の氷雹(ピンパオ一雹)。急いでカメラを取りに行きましたが、2.3分であっというまに向こうの山に走り去り撮れませんでした。今年最後の雷鳥ひなでしよう。その後、日差しは戻ったもののひんやりして晩秋の感じが深まりました。そして、今年もせか西寧市内の木々から紅葉し始めましたが、今は学内のポプラも黄ばみ始め冬か近づいて来る感じがします。天気予報の最低温度3度(最高温度17度)を見たら急になんとなく寒くなって来ました。それでも夜は毛布一枚で寝ています。乾布摩擦のお陰だと思いますが、どうなっているか自分でも分かりません。

今日は久しぶりに夜8時ごろテレビのスイッチを入れてみましたが、第十二回アジア競技大会を二つのチャンネルで流していましたので懐かしくしばらく見ました。

4日はここ2,3日の寒さとは違って、うららかな小春日和となりました。北の空の湖のように深青、それをバックに黄ばみ始めた葉がひらひら光ります。国慶節にこの紺碧の空に翻った深紅の中国国旗も美しかったのですが、これはこれでまた自然の織りなす絵で、毎日微妙に移り変わっていく色合いを楽しんでいます。

今日はまた去年の学生が会食しようとして誘ってくれましたので西寧市へ行き、3時間以上も火鍋(羊のシャブシャブ)をたらふく食べ、例のジャンケンで白酒をゆっくり飲みました。

食べることはかりで申し訳ありませんが、9日も去年の学生と、今度は珍しいタイ族の料理を食べに行きました。竹筒で炊いたミーファン(米飯)、特に黒いミーファンは噛めず噛めずと味が出て、顎が疲れましたがおいしいものでした。それに羊肉の壺煮のスープはビールを飲むのを忘れさせるほどおいしい味でした。

おまけにこの日は大学に帰ると、一人の学生がわざわざ十数キロ離れた西寧駅まで行って、もう寒くなり西寧市内では見られなくなったハミウリを買って来てくれました。(私教室内で「ああ、死ぬ前にもう一度ハミウリが食べたいなあ」と言ったばかりに!)とにかく彼らは親切なのです。私はもし日本でこのハミウリの種を増やす事ができれば、全国の愛好者に配ろうと考えています。それか彼の親切に対するお礼だと思っています。今はとにかく果物がおいしいです。ハミウリと一緒に、あの甘くおいしい小粒のブドウは姿を消し、今は中粒のブドウ(1キロ24円)と新しい干しブドウに変わってしまいました。リンゴ・ミカンはもちろん、桃(これはさすがに少なくなりました)梨・リンゴ梨・栗・柔らかくて甘い柿(1キロ24円)・ナツメ・すもも・バナナ・パイナップルといろいろあって安く気軽に食べられます。しかし、ザクロだけは真紅の大粒で甘くおいしいのですが、なぜか1キロ150円と高いです。

7日は一日中寒、北風にさらされ、2,3日前に色づいてきたポプラがもう身を振るように落葉

し始め、カラスの巣が黒々と見えてきてよいけい寒々としてきました。昼間でも吐く息が少し白くなります。季節としては晩秋なのですが、体感としてはもう初冬といった感じです。学生たちはセーターを二枚三枚と重ね、ズボンの下にも毛糸のものを二枚重ねています。女子学生の中にはその上にコートを着ている者もいます。本当にこちらの人達は着過ぎです。これでは風邪をひくのも当たり前です。去年、私は窮屈なのでとうとうセーターは着すじまいでしたが、来年2月はまだ64歳、用心はするつもりです。しかし、現在着ているものはまた夏とあまり変わりません。身軽くていいです。いつも紺碧の空に日々紅葉していく木々を見上げては急ぎ足です。まあそのうちクリーニングに出したコートを着ることになるでしょう。

夜は寒いですが、去年と同じで教室に自習に出てくる学生たちの質問に答え、また自由に会話を楽しんでいます。何人かは、独学で驚くほど日本語の語彙や文法を蓄積しており、それを初めて日本人におっつける楽しみに興奮しているかのようにさえ感じます。こちらも授業とは違って変わってきた話題を選び、おすおすとお話しかけてくる学生を一気に話の引き込みます。そして、この時々は私も大っぴらに中国語の学習をします。(授業中は一言でも多く日本語のシャワーを浴びせねばなりませんから。)お陰でこのごろは少し中国語が聞えてくるようになり片言も少し出てくるようになってきました。また、教科書の説明文もなんとなく読めるようになってきています。本当に一年で帰国しないでよかったと今更ながら喜んでいるところです。

今日は12日。暇々に書いてきましたので、書き始めてからとうとう二週間以上たってしまいました。そして、この四階から眺める周りの木々山々はすっかり黄金に輝き始めました。季節も変わったことだし、今回のお便りはここで欠回に回すことにしましょう。と言いましてもいつになるかわかりませんが……。

では皆さん、寒さに向かいます折からくれぐれもご自愛ください。

今季最後の輝きを見ている青海から さようなら

1994年10月12日

No.10 (1994.12.18)

①羊一頭、いただく。

②タール寺(塔尔寺)の活仏、阿嘉 洛桑圖旦 様にお会いする。

さて、2年目の生活を始めてみますと、日本語指導にも生活にも慣れているはずなのに、なぜか昨年より追われる毎日で、本当にあっという間にもう任期の半分が過ぎてしまいました。同じ職界で2年以上いるとなんかそうではありますが、人生の晩年の速足には驚くようなものかを感じます。

前回のNo.9にも書いてますように、今年はカリキュラムに表現(会話・作文・表記・書写)を入れてもらい、それを担当していますので、指導面では授業の準備その他一年目と同じ忙しさです。特に会話はある程度日本語が頭に入らないと、お話を返して終わりますので初めは手がかかりました。それに交流はますます広がるばかりで、あちこちから電話が入り、本務を考えれば時々断らねばならないほどです。幸い学生たちは昨年にくらべてずっと早く日本語が流暢になってきました。特に五十音から学習し始めた学生が日本語で話し始めるときは感動的です。

ただ、ある意味ではこの巨大な国を支えている必要悪の権力統制と、その官僚機構の甘い汁をうまく吸おうとする悪癖は、社会の隅々までビールのように蔓延っており、その結果、それによりつけない多くの民衆の諦めと無気力を目を当たりにしては、これも中国の一つの文化なのかと無理に自分を納得させようと思いますが、このことは、不公平な留学生の選考にも現れてきて、日本語教師としては全く無気味感に陥ることさえあります。

しかし、私は日本語指導を通して過去50年間の日本を語るることにより、中国の現実を見つめさせ中国の未来を考えさせています。去年は少し遠慮がちに言っていましたが、今年は中国のこれからの急速な変貌を考える時、どうしても避けて通れないことと思い、少し前後も考えず語ることもあります。——人権、自由、平等、平和、かわかえのない個人の人生、地球人とし



ての国際感覚など。人間は不思議です。心の奥底で求めているものに共通なものがあるからなのでしょう。日本語のレベルは低くても、こういう問題はすっと通じるので驚きです。后門(こね)と関係のない学生はすぐに共感を示してくれましたが、今では関係者でさえうなずいてくれます。63歳という自分の年齢が軽くなりません。もう少し早くこの仕事に切り替えればよかったと、またもや悔やまれてなりません。それでも二年間こうして手応えのある仕事を毎日できるのに感謝しています。

11月12日。朝食を終えて出勤前の一時、ちょっとぼろっとしていたら誰かノックをします。それも学生しか知らない日本式のダブルノックです。開けてみると案の定、学生の才貝(ツェイペイ)さんの顔です。横で「甲乙寄宿学校」の校長の彭措(パンツォ)さんかここにいる。才貝さんは去年の途中から一時「甲乙寄宿学校」へ帰りましたが、今年は本格的に日本語を身につけて、来年からは小学生に日本語を教えていくんだと張り切っています。

「請魚——二人は何か白い大きな袋を持って部屋に入り、それをどかっと置きました。五月に撮った子供たちの写真を先日、百数十枚あげていましたので、彭措さんはまずそのお礼を言った後、二人で例の大きな袋を部屋の真ん中に持ってきていきなり開けました。——初めて見る裸のまるまる一頭の羊です。頭・皮・内臓こそ取ってありましたが、しっぽは立派についていて、四本の脚は宙に突き上げ、真っ赤な肋骨はかっと思開いた大きな目のように迫ってきて、私は思わず一歩下がりました。とにかく羊が大きく見えました。

もちろん、こんな贈り物は初めてなので、何と挨拶したらいいものやら急に言葉が出てきません。しかし、二人のここに顔を見て、やがて私もそうすればいいのだと分かりました。彼は私と同じ年齢で、去年の初対面の時からなんとなくまが合い、カラーテレビを贈ってからますます深いつながりとなっていますので、話すことは多かったのですが、何しろ授業時間も迫っており、ちょうど妹から送って来ていたジャンパーと綿の暖かいシャツ、それに菓子などを無理に持って行ってもらって教室に急ぎました。

しかし、教室に入っても何ゆえ自分の部屋に一頭の羊かと思うと落ち着きません。解体すること、そして、その後どうしたらいいか、何にも分かりません。なんとなくそわそわする気持ちを抑えて授業を終え「誰か生きている羊を食った事のある人はいませんか」と大声でどなると、初めて面喰らっていた学生達もその意味が分かり、そのうちチベット族の梅さん代という学生が「私も教習なので殺したことはありませんが、解体したことはあります。」と言って協力してくれることになりました。また、好奇心のある親切な学生二人も一緒に部屋に来てくれることになりました。

実は、去年の10月、二挺の中国包丁を使いもしないのに、研ぎ師が回って来たので研いでもらっていました。それが一年たって役に立とうとは思いませんでした。人生はおもしろいです。梅さんはまず私が毎日使う日本の出刃包丁を手際良く使いこなして、肋骨一本一本(この骨につけている肉が一番おいしいのです。)を実に丁寧に出していきます。そして、羊はどこが一番おいしいか解説しながら、肉の小片一つ落としません(四本の脚では後ろ脚二本、また背骨の回りなどがおいしいそうです。)あとの二人は彼が解体した肉を中国包丁で適当な大き

さに切ってくれます。三人の手を真っ赤にしての奮闘で、さしものこの三歳の牡の若者も、二時間後には十二のビニール袋におとなしく収まってしまいました。

しかし、それからが大変で、誰にどう配ったらいいか考え、それが終わったのは数日後でした。こんな事はおそらく今後二度とないことでしょうが、それから一カ月経った今も、私の冷蔵庫にはまた肋骨も、背骨の回りの適当に脂肪のついた肉も、首も、後足の肉も眠ったままです。それぞれ、学生たちや日頃お世話になっている方々に差し上げて、手元には少しずつしか残さなかったのですが、何しろ「我不会做菜」(料理できません)ですから……。こちらの牛肉は、毛牛(マオニウ)という黒く長い毛の大きな牛(ヤク)で肉の中に脂肪があまりはいっていませんので硬くてあまり味也没有せん。それより、慣れれば羊の肉の方が柔らかくて食べやすいです。毎日私が通う小吃部(軽食堂)の餃子、ラーメンその他はみな羊の肉です。こんなことを書いていたらきりがありません。

②12月6日。これこそ「縁」と言うべきか。普通授業を終えると、その足で昼食をとるのですが、なぜかこの日に限って料理を注文した後、なんとなく一度部屋に帰ってみる気持ちになりました。そして、部屋に入ったとたん電話です。受話機を取ると民族学院の秦永章先生からです。

彼とは先日初めて会ったばかりですが、その折り、山口節子さんという方の手紙を見せられました。それはタール寺(塔尔寺)の活仏、阿嘉洛桑圖旦様宛の礼状でした。その時々ちょうど来合わせていた海外青年協会の女性も、読んでもよく分からないところがありますと言ったほど達筆で、また最高の敬語と実に巧みな比喩などを使って、活仏に対する畏敬の念と感謝の気持ちを見事に書き上げてあります。そして、その文体は古いのですか内容は新鮮で心温まるものでした。おそらく、少し歳を召された信仰心の厚い、教養のある女性ではないかと推察してしまいましたが、お人柄が滲み出た名文でした。

もちろん、日本へ行ったこともない秦先生はほとんど読めません。その心情あふれる品格のある名文から発せられる謙虚で清純な山口さんのお気持ちを感じとった時、すぐ私の口から出て来た言葉は「私が直接、活仏、阿嘉様の前で山口様のお気持ちをお話しますから、なんとかして下さい。」でした。もちろん、高僧で塔爾寺の最高責任者でもあり、省の副主席などいろんな重責にもあり、普通に簡単に会えない方とは聞いていながら、これはもうどんなことがあっても直接会えるチャンスだと思ったのです。そして、幸い同席されていた活仏の親戚に当たるという方に、その連絡をお願いしておきました。

それがうまく連絡できたのか、「今からどうですか。」という電話なのです。私は食事はもうどうでもよくなり二つ返事でバスに乗り、西寧市体育館前に飛んで行きました。タクシーの運転手が急いでくれるのはいいのですが、カーブも多い山道は少し心配でした。でも、11月16日に降った雪は寺に近づくにつれて山の斜面にたくさん残っており、それが新緑のダムや青い湖に写っていて、それをバックに目の前の並木が次々と後ろに流れていく風景は、これまた見事でした。

塔爾寺に着くと、普通の日にもかかわらず、チベット族の信者達は老若男女を問わず、それぞれ拝殿を礼拝して回っていました。本当に「五体投地」には何回出会っても信仰心の深い私はまともに見ることはできません。もちろん、カメラを向けることも——。「大金瓦殿の前では十万回(1カ月かかる)、タール寺を回れば回(10日ほどかかる)、青海湖を回れば1年かかる」と聞いたばかりでも身が固くなります。いつものように(今回で四回目)その敬虔な姿と美しい民族衣装に見とれているうちに、タクシーは親戚の方のお陰で寺院内の活仏の建物の門まで乗りつけられました。そこには一台のジープが止まっていて、訪問者と思われる人達が数人いました。まず、親戚の方が入って行きましたが、なかなか出て来ません。私はそこが外高く寺全体を俯瞰できるのを幸い写真を撮っていると「今、少しお暇があるそうです、どうぞ。」と言われて門をくぐりました。中では四方を古い建物で囲んで、真ん中は中庭のようになっています。そして

その一辺が活仏の接見室その他になっているようで、他の一辺は活仏が日常礼拝されると思われる特別の御堂があります。他の二辺はよく分かりません。とにかくどの軒先も精密で芸術的な装飾が施され、それが長年の風雪で風化しかけていて味わい深いものでした。

丁寧に通された接見室はきれいな部屋で、活仏はモンゴル人なので成吉思汗の肖像画が掛けてありました。待つこと7.8分、人の気配がしてすぐにそれとわかる活仏、阿嘉様が入って来られました。こちらに向かって合掌しながら近付いて来られます。そして、差し伸べられた両手は、その精悍ではありながら柔らかな眼差しと同じ暖かさがあり、私はごく自然にその上に両手を合わせました。そして、寺院内で準備してきた4メートルほどの純白のシルクの哈達(ハダ)を両手で握りました。(このハダというのはシルクでできており、小さいものはマフラー、大きいものは帯のようなもので長さほどよく、チベット族は尊敬する人を正式に拝問する時はよくこれを相手に上げるようです。そして、普通の人から誰かに差し上げる時は純白のものか最高で、僧侶が誰かにくださる時は黄(橙)色のものか最高だそうです。この辺に青があります。私はこの一年半の間にこの純白のものを中心にもう十数枚いただきました。)阿嘉様もまた橙色のハダを私の首に掛けて下さいました。そして、名刺とこれまた4メートルもあるかと思われる黄色のハダと、昨年江沢民がこの塔尔寺を訪れた際、一緒に撮られた写真のたくさん入った「塔尔寺」という特別のパンフレットをいただきました。

なぜか初めから数十年來の知己のような感じがしました。阿嘉様もまた形式張ったり威厳をひけらかしたりはされず、ごく自然に私を横に座らせられ懇談し始められました。——塔尔寺には今まで3回参詣したこと、その度に信者の敬虔な信仰の信者の姿とその歴史を感じさせる由緒ある建物や文物に感動すること、自分の家は仏教であることなどいろいろお話ししましたが、阿嘉様は大変多忙なお方で普通の面会は10分程度だと聞いていましたので、さっそく山口様の手紙を取り出しました。私はまず、この手紙は初めから終わりまで阿嘉様に対する畏敬の念と感謝に満ちており、また、最高の日本語の敬語で書かれた名文であることを申し上げると、さも嬉しそうにうなずかれました。さっそく手紙の現代語訳に入りましたが、その巧みなたとえのところでなかなか通訳がうまくいきません。なにしろ秦先生は日常ほとんど日本語を話されることはないので当然ですが、もどかしいのです。二人とも悪戦苦闘の連続でしたが、なんとか山口様のいたすらなお気持ちをお伝えすることができました。阿嘉様は満足そうな笑みを浮かべられ、私の手を握って謝意を表されました。そして、その場で、

近藤先生

如果閣下有方便、請參加古曆正月廿九日的“辞旧迎新”法会
非常感謝

阿嘉 洛桑圖旦

と書いた年末(旧暦)の特別法会の招待状をくださいました。そして、「もう私たちは老朋友です。またぜひねいでください。また、これからは何かあったら電話してください。」とも言ってくだ



タル寺



阿嘉 洛桑圖旦様と(右が近藤先生)

さいました。終始大変にこやかな表情をされていましたが、やはり、高僧としての威厳と最高責任者としての風格が感じられました。

そこで一度お別れしたのですが、その後すぐ若い寺の方が「ちょっと待ってください。阿嘉様が何か用意されていますから。」と言われたので一応中庭に出て、回りの古い建物をカメラに収めた後、前記の特刊のお御堂に入らせてもらい礼拝しました。大金瓦殿などの巨大な仏像とは違って小ぶりの仏様ではありますが、何となく興味が感じました。私は立ったまま拝みましたが、ふと気付くと秦先生たち二人は地に伏して礼拝されており、恥ずかしく思いました。再び接見室に帰り荷物の整理などして待つこと数分、再び阿嘉様がはいりなり、

近藤新先生 惠存

塔爾寺 阿嘉 洛桑圖旦 贈 印

一九九四年十二月六日

と、中国人民銀行発行の拡大壹円紙幣を入れた紙入れの表紙に書かれた記念品(達筆の漢字の署名捺印のほか、美しいチベット文字の署名捺印もある)をくださいました。これでまた宝が増えました。

本当に心を通い合うということは至幸至福の極みですね。私は何回も振り返りましたが、阿嘉様は私か門口を曲がるまで笑顔で見送って下さり、私が泊然と手を振ると同じように応えてくださいました。帰りのタクシーの中で、親戚の方は「今日の阿嘉様は本当に嬉しそうでした。こんなに長時間普通の人と会われることは珍しいことです。」と言われました。私は時間を感ぜませんでした。お別れは時間以上だったそうです。とにかく、後味のよい忘れ難い半日でした。お招きいただいた「辞旧迎新」では、伝統的な舞もあるそうで(その時つける面は奈良の寺で舞われる時つける面によく似ています。)今から楽しみです。改めてこの二年間のチャンスを与えていただいた方々と衷に感謝いたします。

その後、交流先で吸い込んだ強力な中国風邪でちょっと発熱したりしましたが、一日振替授業をして、去年9月からの皆勤記録が続いています。今、二重窓の外は去年と違って真っ白です。11月16日に珍しく降った雪が、その後の冷え込みでなかなか消えず、その後また二三回ちらついて今日もちょっと舞いましたので、子供達は雪の凍った道路の上を実にうまく滑って楽しんでいます。終日日が当たった日だまりが少し溶けかけてもそこが濡れることはなく、溶けた分だけすぐ乾いてすぐもとのほこりっぽい土が出てくるのは驚きます。空気の湿度が低いのか全く見当が付きません。これから4月まで続きます。朝、零下14度の中をちょっと風を切るようにして急ぐと両耳が痛くて飛ぶのではないかと心配で急げません。

とにかく、あと3週間たらずで今年の前期も終わります。こんなに二年目が早く過ぎていこうとは思っていませんでしたのであわてるばかりです。人生の時間というものには不思議なものです。若い時ベルグソンの本など読んで、暗に表す時間ではない時間について考えたこと思い出されます。私にとっては答えを出せそうにもない問題ですが、なんとなく感覚的には分かるような気もしてきています。本当に人生の時間は暗に表すなどでは表せませんね。そんな実感のする毎日の一年半でした。なんだか何年分も生きたような気がします。忘れられません。

そろそろ前期の試験問題も作成しなければなりませんし、提出させた日記も読まねばなりません。皆さんも年末が近くなり何かとお忙しい事と思いますが、どうぞご自愛の上、新たな人生に向けてのよい新年をお迎えください。

今ちょうど5時16分。薄く雪を被った西の山の上に、薄霧の寒々とした雲を残して日が落ちていきました……。では今年はこれでさようなら。

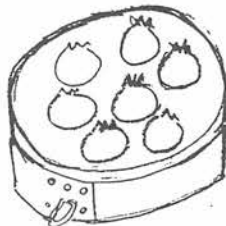
辻野治子

女性パーティで山に行くということが私は好きです。男性と一緒にいくのも楽しいのですが、女性だけで行くと、山行の充実感がとても大きい気分がとても楽なのです。裏がえしていえば、私の場合、男性と行くと、結果的に頼ってしまうところがあったり、その反動で気負っていたりと、なかなか、複雑な心理状態のようなのです。ですから、女性だけでいくと、自分がとてもナチュラルな心理状態でいられて楽なのだと思います。最初から理屈っぽいことを書いて申しわけありませんが、要は女性パーティの山行が私は好きなのです。

従って、今回の遠征が女性隊と聞いて、興味をもち、同じ北海道の市川さんと連絡をとり、参加を決めました。そして、市川さんとは近いうちに北海道の女性隊で遠征を組みたいね、今回はそのためにもいろいろと勉強してこようね、と話をしていました。

と、目標だけは高くもって参加したのです。そして、私にとって、こういう遠征も初めてだし、中国も初めてということで、なにもかも勉強になりましたが、帰ってきて、今、一番、思うのは、いい仲間に恵まれるということが、当り前のことなのですが、やはり、とても重要なことなんじゃないかな、ということです。今回は、日本側のメンバー、中国側のメンバーともに和を大切にする、気持ちのいい、楽しい人たちで、本当にいい仲間に恵まれたと思います。いいチームだったと思います。もちろん、その陰には樊総隊長、寺沢隊長の苦勞あってのことだと思えますが。

一般的に遠征では、登山技術、遠征技術を学び、登山経験を積むということが大きな収穫だと思いますが、今回は、特に、他のメンバーとの長いつきあいの中で吸収させてもらったことの数々が大きい収穫だったと思います。



朝食の小さなメントウ
(肉まん)
中国の人達は 酢正油(?)に
唐からしをつけて食べる。
日本の淑水(?)はそのまま
充分とか...っ

玉壺山 峰 5.933m

金名

李保陸長

沢田・新川・辻野 破産
又、おれが「高山行」の子！

おすは。登壇おめえに
白中ね好こさるさま
僕たちもザンニイナ
下メホ。博。

登頂おめでとうございます。
北家でビルでも飲んで
楽しんで帰ってください。日南

牛乳、りんご、いちご、いちじく、
自分もよいよ。中国へ行くと日本
近ういたといふ会得で拝見
しました。健康も頑強ります。小豆、

作好!“登顶”挑战登山者

青沢隊長沢田、と野市川さん共々、
“山腹に立たれた様”に感動します。

予視隊長のガリード之見事目的を達成し
金銀目に見事だ。少女時代が少し前にかたてゐる。おれ。

漢書の成書年を定むるの事、
又石本。24冊。丁部。東川丁部。廿二丁部。

(94.7.22 北京に2) あつればこそ思ふ
 静光の詩。

登頂おめでとう!! 我々もみながんばりつ
5933m a 山頂 いかにしてか!

すれ違ひなして
へタなメロドラマ
たいですネ！
とにかく

Congratulations!!

泉田
P.S. アダムに登れたら
五竜峰。鉄塔初登
と狙います。

術は、 π 、 r 。
 $A \times B$ の張りを与す。鉄塔？中国の
 20km

〈ミーティングの時に中国語でうたった歌〉

如果幸福大家一起拍拍手
(しあわせなら手をたたこう)

ルークワシーフーターチャーイーチバイバイショウ

1. 如果幸福大家一起拍拍手 (繰り返す)

チュウインタイトバ タビョウシェントッライバ

如果幸福就用态度把它表現出来吧 (1～3)

ランウオメン

訖我們大家一起拍拍手

トウトウチャオ

2. 如果幸福大家一起跺跺脚 (繰り返す)

訖我們大家一起跺跺脚

バイチュンバー

3. 如果幸福大家一起拍肩膀 (繰り返す)

訖我們大家一起拍肩膀



崑崙山峠

II . 資料

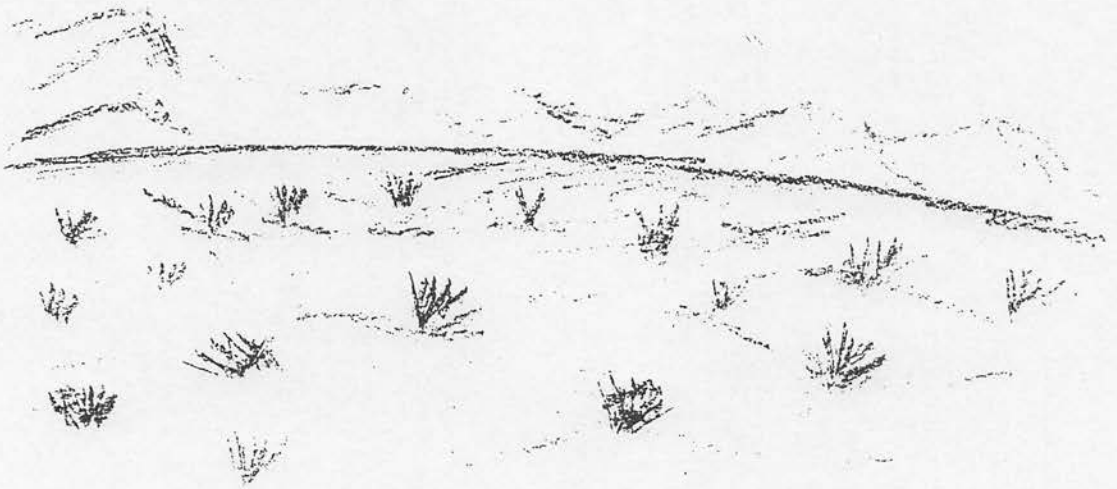
青海省概要

青藏高原探検概略史

中国語実用単語

関連記事

Summary



突然、
遊牧民が現われ
る不思議な
世界である。
ツリタム盆地
アスファルトに乾き跡がつく
ほど気温が高く日差しも
強い。

青海省概要

青海省は青藏高原の東北部に位置し、北部山地、柴達木（ツアイダム）盆地、青南高原（青海高原）の三地域からなり、北東に祁連（キレン）山脈、北西に阿爾金（アルチン）山脈、南には唐古拉（タンラ）山脈、南東には巴顔喀拉（バヤンカラ）山脈そして南西には可可西里（ココシリ）山脈が連なっている。また、中国の二大河流、黄河と揚子江がこの地に源を発していることから、「河の源」とも呼ばれている。省内には中国一を誇る塩水湖、青海湖があり、青海省の名はこれに因んだものである。また、省都西寧にはラマ教の聖地塔爾（タール）寺や回教の清真大寺がある。

面積は日本の約2.5倍近く約72万km²。1992年現在の総人口は約461万人だが人口密度は5.8人/km²にすぎず、中国内の省では人口密度の一番少ない省である。青海省はまた多民族が居住している省であり総人口の42.1%をチベット族、回族、トゥリヤ族、サラ族、モンゴル族が占めている。

キレン山脈やツアイダム盆地には豊富な鉱物資源が埋蔵されている。省内では119種の鉱物資源が発見され、埋蔵量が確認されている97種のうち、10種は中国のトップにランクされている。特に湖塩、塩化カリウム、塩化マグネシウム、リチウム、ホウ酸、天然ガス、アスベストなどの埋蔵量が多く、品質もすぐれている。また、水力発電の開発可能な河川も多い。総出力1798万キロワット、年間発電772億キロワットアワーの水力発電所が建設可能である。

青海省は中国の四大放牧区の一つに数えられている。利用できる牧草地の面積は3300万ヘクタール以上であり、各種家畜2300万余頭が飼育されている。すでに発見された経済的価値のある野生動物は250種以上ある。なかでも野生のラクダ、野生のヤク、野生のロバ、チベットカモシカ、アルガリ、白唇シカ、ユキヒョウ、ナベコウ、ソモンカモシカなどの10種は中国の1級保護動物に指定されている。野生植物は75類1000種以上ある。なかでもトウチュウカソウ、ユキハス、バシクルモン、ブンカンジュ、カワラサイコなどは特に有名である。

1959年に開通した蘭青鉄道の他、新中国成立後に建設された青蔵道路や青新道路などの自動車道路、1991年に完成した西寧空港がある。

（中国画報Vol.500, コンサイス外国地名事典参照）

青藏高原探検概略史

※1328～30年、イタリア、フランシスコ会のF・オドリコ・ポルデノンがカンパリク(北京)～甘肅～青海經由でラサに入り、ヨーロッパに戻ったと云われているが、真偽のほどは不明。

※1661～62年、神父ヨハン・グリュールとドルビーユが北京から西寧へ、更に青海湖南岸から柴達木(ツァイダム)盆地に入り、青藏高原を横断して拉薩(ラサ)に到達した。その後二人はラサからギャンツェ、シガツェを經由して、ネパールのカトマンズからインドへ抜けている。

※1729(又は1937)年、オランダのサミュエル・ヴァン・デ・ブッテは隊商に加わり、ラサから那曲(ナクチュウ)～ディチュウ～青海湖を經由して北京まで往復した。

※ロシアのザヤーエフが青海からラサへ行った。詳細は不明。

※1844～46年、布教を目的にフランス、ラザロ派のユックとガバーの2人は内蒙古の黒水から万里長城北側のドロノール、歸化城、寧夏(現銀川)、西寧、日月峠を經由し、ツァイダム盆地からタンラ峠、ナクチュウを經由してラサに到達した。その後二人はラサから昌都(チャムド)、巴塘(バタン)、打箭炉(タチェンルー、現康定)を經由して成都へ抜けている。

※1870～1873年、ロシアのニコライ・ミハイロヴィッチ・ブルジェワルスキーはキャフタ～カルガン～青海湖～長江源流のムル・ウスに達した。その後、ラサまで行く予定であったが資金不足等の為、往路を戻った。

※1878～82年、クリシュナが青藏高原を南から北に縦断してラサからツァイダム盆地まで達し、チベット各地を実測した。

※1879～80年、ロシアのブルジェワルスキーは第三回目の探検でツァイ

ダム盆地からタンラ峠を越えてナクチューに達した。そこからラサに入域を試みたがチベット軍に追い返され、帰途黄河源流域を探った。その折、布爾汗布達(ブルハンプッダ)峠を此の山脈名とし、マルコ・ポーロ山脈(現可可西里山脈又は冬布里山脈)を越えて揚子江上流のムル・スウ河を渡っている。1883～85年の第四回目の探検では、青海湖からブルハンプッダ峠を越えてザーリン(ツァーリン)湖とオーリン湖を探った。
※1881年、インド測量部のパンディットがチベットから黄河源流域に到達し、青海湖畔付近まで探った。

※1882年、フランスのグレナードは1881年のパンディット同様、青海湖畔に到達した。

※1889年、フランスのガブリエル・ボンヴァロは第三回目の探検でアルチン・ターク北麓のチャクリクから南下、アヤククム湖とアチクコル湖間を通り、チマング、コロンプス山脈、ブルジュワルスキー山脈(現可可西里山脈)を越える。この探検中火山を発見しルクリュと命名、7000m級の白い峰をフェリエと呼ぶ(カンツァーリ崗札日6303mか)。この付近で数個の火山丘を発見し、リエイスブルック火山と命名。更に南下し、1890年 8000m級と思われる氷の峰のある山脈に、フランスで最も美しいとされている山に因み、デュプレスク山脈と呼ぶ(現タンラ山脈6500m級)。更に東南方に向かい、ナム・ツォ湖畔に達し、湖面高度を測定する(4670m, 現青藏高原地図では4718m)。チベット人に阻まれラサへ向かうことが出来ず、タチェンルーに向かう。

※1884～1886年、ロシアのポタニン夫妻は北京～西寧～青海湖～チベット北部を通りゴビ砂漠からキャフタに抜けた。

※1888～1889年、アメリカのW・W・ロックヒルは北京から蘭州～西寧～青海湖を経てツアイダムからラサへ入ろうとしたが、デチューからタチェンルーへ出た。

※1891～1892年、ロックヒルは北京から蘭州、西寧、青海湖を経てツァ

イダム～タンラ峠を越えたが、阻止されてチャムドからバタンに出た。

※1893年、ジョージ・R・リトルダーはロシアのサマルカンドからカシュガルに至り、クルラからロプ・ノール～青海湖～蘭州に達した。

※1893年、ドゥトルイユ・ド・ランとグルナールはボンヴァロのルートより更に西方のルートを通じた。

※1894年、個人的伝導でオランダ/カナダ人のピーター、スージー・リジンハート夫妻は11ヶ月の子供連れでラサを目指し、上海～蘭州～西寧～青海湖～ツァイダム～タンラ峠を経由してナクチューに着いたが阻止され、玉樹(ユイシュ又はジェクンド)、甘孜(カンツェ)、タチェンルーを通って四川へと出た。途中で夫と子供を川に流され失う。

※1895年、リトルダー夫妻は1893年のラン達と同様にボンヴァロのルートより更に西方のルートを通じた。

※1896年、M・S・ウェルビーとN・マルコルムはラダックのレーから北チベットを通ってツァイダム～青海湖を経て北京に出た。

※1900年、ロシアのG・G・ツイピコフは巡礼ラマの一行に加わりタール寺～ナクチュー～ラサに着いた。

※1900年、能海寛は青海からのチベット入りを企て、西安～蘭州～西寧～青海湖に達した。

※1899～1901年、ピョートル・クズミッチ・コズロフは第三回目の探検で、青海～オーリン湖～ツァーリン湖に至り、長江とメコン川の上流を探った。又、1903～1904年の英国軍チベット侵入のためタール寺に難を避けていたダライ・ラマ13世に会った。

※1901年、スウェン・ヘディンは第二回目の探検でボンヴァロとほぼ同

じコースでアチクコル湖とアヤククム湖の間に至った。その後、ボンヴァロより西寄り、リトルダール夫妻より東寄りのコースの前人未踏の地を南下。ココシリ、タンラ等の山脈を越えラサ入を企てるが失敗し、チャン・ラを越え、レーからスリナガルに出た。

※1903年、寺本婉雅は青海のタール寺に着いた。

※1903～1905年、ドイツのW・フィルヒナー夫妻とA・ターフェルは西寧から青海、巴顔喀拉(バヤンカラ)山脈の北側、黄河上流の探検をした。

※1904年、J・ル・レダン夫妻はタンラ峠を越え、ナムツォ(テンリ・ノール)から転進してシガツェに辿り着き、ギャンツェからシッキムに出た。

※1904年、リトル・ダール夫妻はル・レダン夫妻同様ラサを目指したがチベット軍に阻止され、リトル・ダールは行方不明となり、夫人は必死の思いでタチェンルーに着いた。

※1905年、寺本婉雅は西寧から青海～都蘭を通りナクチューからラサに入り、シガツェからシッキムへ出た(『蔵蒙日記』寺本婉雅著横地祥原編 芙蓉書房)。

※1905～1906年、C・D・ブルースとW・T・レイヤードはレーからアクサイン高原を越え、タクラマカン砂漠から蘭州～北京へと出た。

※1905～1907年、アルベルト・ターフェルは黄河源流～ツアイダム～東チベット(カム)の探検をした。

※1907年、コズロフ等は青海～ツアイダムの探検をした。

※1917～1921年、A・デヴィッド・ニールは北京から西安～蘭州～西寧～タール寺～青海湖付近の旅をした。

※1921～1922年、イギリスのジョージ・ペレイラはアムネマチンに接近し、青海からラサに入りカルカッタに出た。

※1922～1923年、A・デヴィッド・ニールはジェクンドからメコンとサルウィン川の間を南のリウオチェなどを往復した後、ザーリン湖、タール寺の北部を探検した。

※1925～1928年、G・N・レーリヒと夫人それに長男が中央アジア、モンゴル、チベットを探検した。スリナガル～和田(ホータン)～カシュガル～ウルムチを経てソ連領に入り、モンゴルへ抜け、南下してナクチューから西へ迂回し、ティンリ～シュカエル～カンパ・ゾンからダージリンへと探査した。

※1925～1933年、I・スミノフはソ連から亡命し、新疆～ウルムチ～タリム盆地～青海～ツァイダム盆地を放浪し、1933年に天津に辿り着いた。

※1926年、1922年から12年間雲南、カムの山地に滞在していたJ・F・ロックはアムネマチンの探検をした。

※1927年、ロシアのニコライ・レーリヒはツァイダムからタンラ峠を越え、ナクチューから西方を大迂回してダージリンに抜けた。

※デヴィッド・ニールは青海湖～東チベット～ブータンを歩いた。

※1930年代にロシアのステファン・イワノヴィッチ・スミノフは テンリ・ノール付近に達したと云われているが、詳細は不明。

※1934年、アメリカのハリソン・フォーマンはW・B・シンプソンと L・ホーヴァスが殺害された後1人で北東チベットを歩き、アムネマチン山群を探った。

※1934～1935年、ブルック・ドウラン、エルンスト・シェーファーは東チ

ベットを成都から探検し、タチェンルー～バタン～ジェクンドから黄河と長江の源流周辺を歩いた。

※1935～1937年、W・フィルフナーは蘭州～青海湖～ツアイダムを越え、新疆～カラコルム峠～デブサン高原～サセル峠～レーに至った。

※1942～1943年、レオ・トルストイの孫イルヤ・トルストイとアメリカ軍人のブルーク・ドランは軍事物資輸送ルートの調査の帰路にラティン・ゴンバ～ケマ・ゴンバ～ジェクンド～青海湖から蘭州へ出た。

※1943～1945年、木村肥佐生はモンゴル僧ダワサンボーとしてモンゴルの中公旗から青海～ラサへ向かった(1944年2月タール寺を出発し、香日徳(現尚格＝シャン)～巴隆(バロン)～ブルハンブッダ山脈越え～タンラ峠～ラサ)。

(『チベット潜行十年』木村肥佐生著 毎日新聞社、『チベット偽装の十年』木村肥佐生著 スコット・ベリー編 三浦順子訳 中央公論社)

※1943～1945年、西川一三はモンゴル僧ロブサンサンボーとしてモンゴルの中公旗から青海～ラサへ向かった(1945年2月西寧のタール寺を出発し、シャン～バロン～ブルハンブッダ山脈越え～タンラ峠～ラサ)。

(『秘境西域八年の潜行;上、下、別巻～秘境チベットを歩く』西川一三著芙蓉書房)

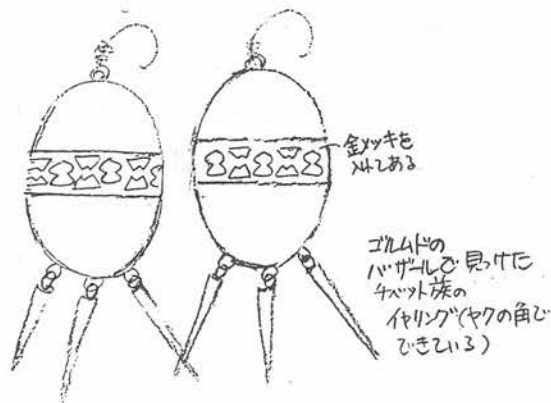
※1946～1947年、フランスのアンドレ・ミゴはハノイから空路昆明に入り成都からラサを目指したが紅軍に捕まり、バヤンカラ山脈を越えて青海のタンガル～青海湖～西寧～北京へ引き返した。

※1949年、レオナルド・クラークは西寧から青海に入りアムネマチンを探検、その高度を9041mと測量した。著書「謎の山アムネマチン」は有名。

文責 寺沢 玲子

〈今回の遠征でよく使った中国語実用単語〉

とてもおいしい	ハチー 好吃	だめです	メイハオ 没好
お腹がいっぱいです	チーバオ 吃饱了	ありがとう	シェシェ 謝謝
少し	イーディアル 一点儿	どういたしまして	フーシェ フーチ 不謝、不客气
気を付けてください	シャオシディアル 小心点儿	出発しましょう	フオバ 走肥
ごくろうさま	シンクーラ 辛苦了	休みましょう	フオバ 休憩肥
わかりました	ミンバイ 明白	いりません	フオ 不要
わかりません	フーミンバイ 不明白	疲れしました	ウオレイ 我累了
大丈夫です、OKです	メイウェンティ 没问题	同じです	イーヤン 一样
良くないです、悪い	フーハオ 不好	お茶をどうぞ	チンフーチャ 請喝茶
気にしないで	メイケンジー 没关系	トイレ	フーソ 廁所
申し訳ありません	トウイヂイ 对不起	ただいま	ホエイイ 回来了
寒いですか	ロンガ 冷不冷	またあした	ミンティエンジョン 明天見



PEOPLE

Mrs. FAN YONG NING

1977年7月当時21才のファンは、ソビエトとの国境に聳える天山山脈の最高峰トムールの山中にいた。トムールはソビエト側で1943年に発見測量され、戦時中だったこともあり「勝利の峰・ポペーダ」と命名された。1956年8月30日ソビエト隊によって初登頂されたが、その後も雪崩のため多くの死者を出している難峰であった。

中国名のトムールはウイグル語で「鉄の山」の意味であると云う。中国は1977年6月、国家体育運動委員会、「ハ・ー」登山隊、チベット登山隊の合同チームを結成し、張俊岩が隊長となりトムールに入った。21才のファンはこのチームの一員に選ばれ、曾曙生（現中国登山協会常務副主席）の指揮下に配属された。

登山隊は暴風雨、寒気、大雪などの困難を克服し、6つの前進キャンプを設け7月25日、劉大義ら11名が登頂に成功した。ファンは第2次アタック隊として27日ファイナル・キャンプに入ったが降り止まない暴風雪のため56時間も閉じ込められたが、7月30日トムールの頂上に立った。

この時に頂上に立てられた測旗によって測量が行われトムールの標高は「7443.8m」と算出されたのである。

ファンは西安に生れたが、10才の時に青海に移った。1972年6月中学を卒業して小学校の教師を1年経験した後、1974年9月に中国登山隊に入り登山の生活が始った。

75年にはチョモランマ隊に参加、翌年ボクタでの技術訓練の後、前述したトムール隊に参加して登頂に成功した。78年にはイランとの合同チョモランマ隊の訓練に参加。79年中国登山隊を離れて青海登山協会に配属となった。

80年から85年までは、登山協会の様々な仕事に従事。対外開放する山々の偵察、外国登山隊の受入れ、又、登山隊に随行する連絡官などを経験。

85年から88年まで武漢体育学院で主に「体育理」を学ぶ。卒業後は再び古巣の登山協会に勤務。89年から90年にかけては、折から中国にブームを呼んだ岩登り競技会に出るようになり、女子の部門



で連続して5位になった。

91年からは青海登山協会理事、国際体育旅行社外連部経理などの職に就き、外国からの賓客の接待などを担当していたが、92年には青海登山協会登山隊隊長になった。

トムール以来暫く高峰の山頂に立つ機会がなかったが、92年夏には玉珠峰で開かれた「国際キャンプ」で、玉珠峰の近くにある5,758m峰に登ることができた。

91年11月から12月にかけて長野、山形、東京を訪問し、多くの日本の登山者と友好を深めた。

7月23日から8月10日までの19日間ファン女史と共に過した。ガッシリとした体格からは想像もできないほど、かろやかな身のこなしで我々6人を接待してくれた。玉珠峰のBCでは宴会が終ると、「マッサージの勉強をしている」とのことで、隊員の体を揉んでくれた。このマッサージのお世話になった脇田、太田が登頂者になったので、下山後皆で大笑いしたものだ。

肺水腫になって街へ降りた得田にも微に入り細に入り気をつかってくれた。かく云う私もBCを去る日から歯痛に悩まされた折にはお世話になった。

青海の自然を生かした様々なアウトドアを誘致し、日中友好を進めたいと話す。ダンスもカラオケもこなす一女の母親である。

ファン・ヨンニン（樊永寧）

青海省登山協会・登山隊々長

青海日報

QINGHAI RIBAO

青海省登山協會和日本喜馬拉雅協會

女子聯合登山隊征服玉虛峰

西寧訊(通訊員鄧海平 樊永寧) 青海省登山協會和日本喜馬拉雅協會共同組成的中日女子玉虛峰聯合登山隊; 7月14日12時20分成功地登上了海拔5933米的玉虛峰頂峰。這是我省第一次由全部女性組隊的登山活動。

中日女子聯合登山隊於7月3日從西寧出發; 途徑黑馬河、都蘭、格爾木, 前往玉虛峰山區。經過幾天的途中適應訓練, 聯合登山隊7月10日晚8時30分到達玉虛峰大本營。

14日在中方隊長樊永寧的帶領下, 經過6個多小時的共同奮戰, 於當日中午12時20分聯合登山隊全體隊員和1名翻譯, 突擊登頂成功。

日本喜馬拉雅協會曾多次來我省進行登山活動, 4次攀登我省最高峰——新青峰(海拔6860米), 繼1992年登頂成功后, 又派隊征服了6179米的玉珠峰。該會自1967年創建以來, 和許多國家共同進行了登山、探險等, 開展了一系列體育文化活動。1985年首次組成中日女子聯合登山隊, 攀登過新疆境內的一座無名山峯。時隔9年又一支中日女子聯合登山隊, 以她們勇敢、進取、頑強、拼搏的精神, 征服自然, 巍巍崑崙山中再現中日婦女的英姿。

女性隊が玉虚峰制覇

日中合同 道内の2人も参加



玉虚峰山頂で登頂を喜ぶ登山隊。右側4人が中国隊メンバー。左から2人目が市川春代さん＝7月14日正午すぎ、辻野治子さん撮影

【苫小牧 十別】道内の「山脈東部」にある玉虚（ユイ）女性アマチュア登山家二人（シユ）峰（標高五、九三三）を含む日中友好女性合同登山隊（樊永寧・総隊長）が、このほど中国青海省の崑崙山（ユイ）以外の登山は初めて、日本人以外の登山は初めて、日本ヒマラヤ協会が昨



夏、玉虚峰の姉妹峰にあたる玉珠（ユイチ）峰（六、一七九）に登頂しサマーキャンプを行ったのがきっかけで、地元の青海省登山協会が日中親善登山を呼びかけ、合同隊が結成された。日本からは苫小牧市内の保母、市川春代さん（四四）と十別市内の主婦、辻野治子さん（三三）ら同協会の女性四人が参加。中国から樊総隊

長（三三）ら女性三人のほか、網走管内で酪農研修の経験を持つ通訳の王琦さん（三〇）ら男性四人が同行した。

日本隊の四人は六月三十日に日本をたち、青海省の省都、西寧で中国隊と合流。標高約五、〇〇〇の地点にベースキャンプを張り、七月十四日午前六時すぎ、女性隊員七人と王さんが出発、同日正午すぎ、雪に覆われた山頂に立った。

見事な晴天に恵まれて、どこまでも続く雄大な崑崙山脈を眺めながら「また、この山のどれかを目指そう」と再会を約束したという。

四人は二十四日に帰国。辻野さんは「北海道弁を交えた王さんのユーモアあふれる通訳のおかげで、すっかり打ち解けあえました」。市川さんも「山頂で地球の広さにただただ倒された。樊さんと王さんを日本に招きたい」と話している。

友好の峰 玉虚峰

日中女性登山隊登頂記

寺沢 玲子

〇〇1



△てらさわ・れいこ
昭和26年8月29日生まれ。
野辺地町出身。登山家。
日本ヒマラヤ協会会員。
独協大学入学後から本格
的に登山を始める。昭和

55年春、ネパールのイム
ジャ・ツェ(6169m)に
遠征を皮切りに7度の海
外登山を経験。今回は日
中友好を目的とした女性
合同登山隊の日本側隊長
として中国青海省の玉虚
(ユイシュ)峰5933
mに登頂に成功した。

七月十四日午後零時二十分、七人の日中女性と通訳の計八人が玉虚峰(五、九三三)の頂上に立った。ヒマラヤの高峰に比べるとスケールも小く、その上、未踏のはずの山頂では鉄塔の出迎えを受けはしたが、やはり感慨深いものがあつた。これが日本側の隊員だけだったなう、感激も半減したことだろう。風俗も習慣も話す言語も、そして登山観も異なる彼女たちと共に立った頂上だからこそ喜びもひとしおであつた。

玉虚峰―日本語的には、現在でも玉虚峰少なからず奇妙な響きの北山ろくには道教ゆかこの峰は、青海省とチベリの岩面や遺跡が残されツトのラサを結ぶ青蔵公路上、崑崙山脈の西側に位置しており、その昔、王母伝説の地でもあり、道教聖地派の発祥した地、西王母が諸神を招請し

東奥日報 1994.8.9

伝説の地



玉虚峰頂上に立つ日中隊員(左から2人目が寺沢さん)

女神思わせる山容

妻子牙・済公仏がこの地で修行を積んだとされていいる。いわば麗術伝説の中心地である。そのためか、東西約二千五百mに及ぶ世界一古玉虚峰の姉峰といわれる崑崙山脈といわれる長大な崑崙山脈の中において、この一帯が最も神聖な地とされているようである。玉虚峰(六、一七九)が美しい山容を見せている。伝説によると、玉帝の二人の妹玉珠と玉虚が帝の目を盗んでは地上に降り、近くの池で沐浴も

くよくよを楽しんでいたが、ある時帝の知るところとなり、二人は永遠に地上に降ろされることになった。その二人の地上でのすみかとなったのが、玉珠峰と玉虚峰であるといふ。この伝説を裏付けるかのようには、公路から望む玉虚峰は、まるで貴品あふれる女神の寝姿を思わせる白きたおやかな山容をしている。話を現実に戻そう。玉珠峰には一九八五年、日本山岳会隊が登頂している。当時は力カサイジモンカ峰と呼ばれていたこの峰も未踏峰との発表であつた。また、玉珠峰周辺には手ごろな峰が多いため、一昨年から国際キャンプ形式での登山が行われており、特にヨーロッパからの登山者でにぎわっているようである。今夏われわれの仲間も登山中であつたにもかかわらず、彼らも今回のわれわれ同様、鉄塔の歓迎を受けている。一九九三年夏までは、玉珠峰と力カサイジモン力とは同一の峰である、との見解を示していた青海省登山協会では、今夏一転して同山群中の異なる峰であると発表しているが、真偽のほどは定かでない。



友好の峰、玉虚峰

日中女性登山隊登頂記

寺沢 玲子

〇〇 2

六月三十日、四時間の空の旅で北京に着く。数年前と比べると、道路は整備され、ビル群もその数を増しているが、一步裏通りへ入ると相変わらずの下町風景がある。そんな中で、何より変化を感じさせられたのは、華やかになった女性の服装と通りに限らず百貨店の踊り場にまで陣取っている物置の出現である。翌日、西寧へのフライトはなぜか蘭州へと変更となり、ジープ型の車で

青海省の省都西寧のホテルに到着したのは日付の変わった午前三時三十分過ぎであった。いよいよ青海の地に足を踏み入れることができたわけである。

教科書になるが、先に少し青海省の概要を述べてみたい。

青海省はチベット高原東縁部を占め、総面積は七十二万平方キロメートル。実に日本の約二・五倍に及ぶ。一九九二年現在の総人口は四百六十一万人、

そのうちチベット族、回族、トゥワリヤ族、サラ族、モンゴル族が四二・一％を占めており、中国国内

で最も多民族が居住している地である。中国二大河流の黄河、長江（揚子江）の水源地でもあり、中国最大の塩湖・批判湖の六倍の大きさを超える青海湖（コノール）がある。省の名はこの湖にちなんでいるという。

「世界の秘境」と言われ、にくだ地であったろう。るチベット自治区の一部が、外国人に開放されたのが一九七九年なのに比べると、青海省の開放は一九八一年。対外開放政策を進めていた中国で一番最後まで開放されなかったのが、この青海省であった。言い換えれば、中国奥地の中で最も入城し

それでもわれわれヒマラヤにあこがれる者にとっては「青海」の呼称はなじみがある。軍の諜報（ちょうほう）活動とはいえ、青海からチベットへと足跡を残している日本人が、二十世紀初頭から中ごろにかけて三人ほど記録されている。その中の一人、第二次

開放遅れた「秘境」



はるかに広がる青海湖。青海省の名はこの湖にちなむ

大戦末期に特務機関員として、チベット、さらにはインドへと放浪した西川一三氏の行動記録「秘境西域八年の冒険」は、大学生当時、手に汗を握りながら読んだものである。それから二十余年後、いかに交通機関が発達し世界の距離が縮んだとはいえ、自らがこの地の一角に足を踏み入れ、まして山の頂を目指すことになろうとは思いませんでした。当時、西川氏が生命の危険を賭（か）して通り抜けた青海に、われわれは何の苦もなく訪れている。余談ながら、西川氏は現在盛岡に健在で

東奥日報 1994.8.10

友好の峰、玉虚峰

日中女性登山隊登頂記

寺沢 玲子

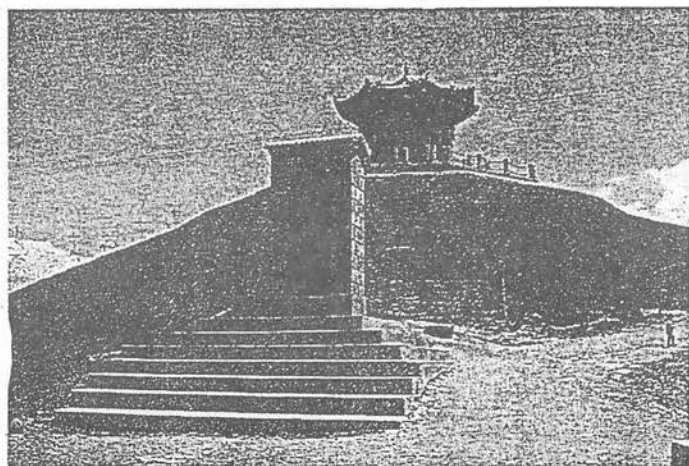
〇〇3

準備を整え、七月三日西軍を後に車での千のキャラバンをスタートする。困ったことに夜は九時になっても明るく、午前六時にはすっかり夜が明けてしまうので、皆寝不足気味である。しかも、既に標高は二、〇〇〇〇を越えており、高度はこれから上がる一方だし、さらに西へ八百〇近く移動するわけである。一抹の不安がよぎる。

青蔵公路と旧入吐瀋道を分ける日月山峠(三)、七世紀、唐の皇女文成公主はチベットへ嫁ぐが、その折、故郷への未練を断ち切った地がこの日月山峠で、峠には文成公主を記念する堂が建てられている。

東奥日報 1994.8.11

高地順応



日月山峠に立つ文成公主記念の堂

頭痛の悩み消える

ばかりだったか、察するには余りある。峠を後に進むと、間も

なく海のような青海湖が見えてくる。標高三、二〇〇〇にあるこの湖の南側は、気持ちの良い草原となっており、ヤクやギタチガのんびりと草をはんでいる姿があちこちに見られる。そういえば日本でも有名な「草原情歌」は長い

う。この地で育にする「草原情歌」は、しつとりと胸に響く。素晴らしい景観を楽しんでばかりはいられない。登山期間の短いわれわれは、山の高さの割に標高の高いベースキャンプへ入るまでに、順応していなければならないとの大きな課題がある。そこで黒馬河周辺で四、〇〇〇

の大きな課題がある。そこで黒馬河周辺で四、〇〇〇の高山に順応すべく、四泊のテント生活をすることにした。前年夏に周辺を通っている知人の話では、花は美しく水も豊富というところであったが、資金力のないわれわれはいくらかでも航空料金の安いうちに、四週間も計画を練り上げたため、花はおろか全く水がない。仕方なく車で片道二十分かけての水くみをするに、して一件落着となった。約三、五〇〇の初日の夜は、頭痛に悩まされて眠ることのできなかつた隊員もいたが、この場所での順応はやはり成功だったようで、その後強い高度障害は出なかったようである。

友好の峰、玉虚峰

日中女性登山隊登頂記

寺沢 玲子

〇〇4

七月七日、順応訓練を
終え、こよいの宿の都蘭
を目指す。途中、省内最
小の塩湖茶卡で塩の採集
を見学し、塩の山に登ら
せてもらう。茶卡の西側
からは荒涼たる砂漠とな
るが、夏日哈を過ぎると
荒野の中のアシスのよ
うに菜の花畑と小麦の緑
が美しい。主A線
しかし、水路沿いのこ
れらの畑のすぐ向こう側
は完全に砂漠化してお
り、いかに不毛の地なの
かがうかがえる。道が南

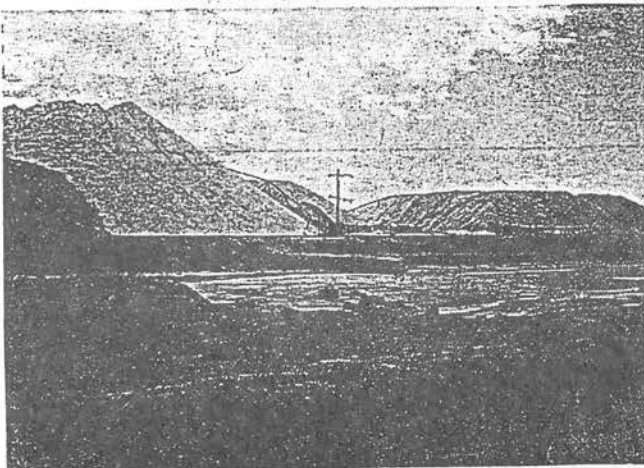
低い灌(かん)木が目につくだけである。
あちこちで小さな竜巻や砂あらしが黄色い砂を巻き上げ、流砂に美しい風紋を見ることがある。行く手にゆらゆらと白い水たまりやボブラ並木が、かげろうのように揺れている。しんきううた。最初は騒いでいた隊員たち、一週間ぶりにシャワーを浴び、心身ともにリフレッシュして登山活動に備える。
七月九日、ベースキャンプ(B.C.)に近い高度を体験しておこうと、崑崙山峠わきの四千九百呎の丘まで足を延ばす。二千八百七呎のゴルドムから四千七百七十五呎の峠まで車で約三時間。一帯はかなり良質の砂金が採取でき家財道具を満載したトラクターが行き交う。

黄砂舞い揺れる幻影

峠の手前で五体投地をしている女性を抜いた。ネパールやインドのラマ教寺院の周辺では幾度となく目にはいるが、このような道端でのそれは話には聞いていたが、初めてだった。

側面に急な坂と街が近いらしく、水路の両わきに並木が植えられ、新疆の街を思わせる。少しでも水を確保する砂漠の街の知恵なのだろう。
洗面する水も出ず、トイレの水も流れない宿で一夜を過ごし、省内第二の都市ゴルドムへ向けて出発する。いよいよソチャイダム盆地の真ただ中を走ることになる。
東西八百五十*、南北二百五十*に及ぶこの盆地内では、樹木らしいもの

不毛の地



茶卡の塩の山。左手の白い山はそのまま食用にする

その日の帰路、さほど離れていない所で再び会った。聞くと、何と西寧のタール寺から一年二カ月かけてここまでたどり着き、一千*先のラサマで五体投地するのだという。五体投地の速度は一日約三*といわれている。言葉も失い、思わず合掌するわれわれに、女性はいい歯を見せて合掌し返した。

東奥日報 1994.8.12

友好の峰玉虚峰

日中女性登山隊登頂記

寺沢 玲子

〇〇 5

七月十日、車でBC入り。峠からいったん南下した公路を少し西に走り、そこから道なき道を北上する。

大平原のあちこちに、野生のシカやロバが群れをなして走り回り、ナキウサギたちが穴から穴へと忙しく走り移る。花は見かけないものの、真に野生の王国である。野生のヤクやオオカミも多いと聞く。確かに動物の骨もやたらと目立つ。

しかし、西寧省以来、夕方になると降り出す雨のため、道がぬかるみトラックがすくにはまってしまう。BC予定地に着いたのは既に八時を過ぎ、テント設営中にすっかり暮れてしまった。

十一日、昨日の疲れからか、午前十時を過ぎてはだれも起きない。昼過ぎから山ろくを偵察し、翌十二日予定ルートを探る。皆、日本の山にいたのと同じスピードで

動けるので、十三日に休養後、十四日BCから直接アタックすることに決める。

あつけないほどスミーズに登山は終わった。登山が初めての中国側二隊員も通訳も山頂に立った。正直なところ、こんなにも緊張感も充実感も

薄いとマラヤ登山もあるのかと自問したほどである。しかし、ここに至る経緯や中国側隊員たちの喜ぶ姿を見ているうちに、ジワジワと胸が熱くなってきた。厳しい登山はんはもちろんだが、時には反目しておもしろいが、ほのぼのと温かい登山も悪くはないなと思えてくるが不思議である。

固いぎずな胸熱く

チベットやカラコルムよりもはるかに遠い存在に思えていた青海の地で、短い期間ではあるが

青海の女性たちと生活を共にできたことは、私にとっては何よりの収穫であった。

登山事情も技術レベルも、またその根底ともなっている社会体制も異なる者たちが、時には反目し合いながらもお互いを思いやり、尊重し合おうとするこそ合同隊の良さであろうと思う。

元来私は山そのものより「人」が好きなのかもしれない。いつも己と全く異なる価値観を抱いている人たちとのふれあいが楽しく思える。また再びかの地を訪れる機会に恵まれるならば、今度は山を離れてじっくりと青海の地の空気を吸ってみたい。

私たちのささやかな友好登山は終わったが、彼女たちとの間に一本のきずなができた。日本側隊員たちの間では、今度は日本に招いて合同登山を、この計画も出ている。

民間レベルのささやかな友好・親善であるが、この灯を細々とでも伝えていきたいものである。

（日中女性登山隊・日本側隊長 野辺地町出身）

〓終わり〓

登はん



ベースキャンプ近くで拾った獣骨。あちこちにある

東奥日報 1994.8.16

YUSHU

CHINESE-JAPANESE LADIES JOINT EXPEDITION, 1994

REIKO TERASAWA

THE KUN LUN MOUNTAIN range is known as the holy place of Taoism in China, especially in and around the Kun Lun pass. The ladies joint expedition for Yushu (5933m) was offered to us by the Qinghai Mountaineering Association last summer. We were informed that our object was an unclimbed peak because it is one of the most sacred mountains. It is situated on west side of Kun Lun pass (4775m) located on the Qing-Zang highway linking Xining, the provincial capital of Qinghai, to Lhasa in Tibet. The legend says that the emperor in heaven made his two younger sisters named Yuchu (or Yuzhu) and Yushu (or Yuxu) live on the earth permanently because he found that they had enjoyed taking a bath at the lake near Kun Lun pass secretly. Princess Yuchu was made to live on Yuchu (6179m) and princess Yushu, on Yushu (5933m).

On 30 June 1994, four Japanese members left by air and reached Beijing the same day. The next day we flew to Lanzhou and from there we carried on to Xining by car. We joined the Chinese members and staff in Xining and got ready for our expedition.

On 3 July, we left Xining and stayed at Heimahei on the south side of lake Qinghai, for four days to acclimatise to the high altitude. After the acclimatisation at Heimahei, we arrived at Golmud in the famous Qaidam basin.

On the 10th, we crossed the Kun Lun pass and went by jeep towards the place pre-arranged as our base camp situated on a rough plain. Hordes of wild donkeys, chilues (scientific name = *pantholops hodgsoni*), some kinds of guinea pigs and others were running about. It is said that one can see wolves and wild yaks here too. We reached and established our base camp after 8 p.m.

On the 11th and 12th, we reconnoitered the south side of our peak and checked our route. After resting on the 13th, we tried to attack the summit from our base camp directly on the 14th. We started from the base camp at 6.00 a.m. and reached the summit at 12.20 p.m. All members could stand on the summit because of the gentle snow slopes, in spite of it being the first experience in mountaineering for two Chinese members and the interpreter.

We were surprised to see a triangular iron tower, 3 m high, waiting for us on the summit! All of us thought we had imagined it, but it was there. After the expedition, I asked the president of Qinghai Mountaineering Association about this

fact, but he was also surprised to hear our report. In 1985, one of the Japanese Alpine Club teams was sent to Yuchu (called Kakasaizimongka 6179m) for their Club's 80th anniversary. They were informed that Yuchu was an unclimbed peak at that time. But they were also welcomed by the same type of triangular iron tower when they reached the summit.

By the way, the Qinghai Mountaineering Association holds International Mountaineering Camps round the Yuchu mountain range. Two HAJ teams in 1993 led by K. Yamamori and in 1994 led by Sakai succeeded in climbing Yuchu.

Mountaineering in China has opened up since 1980. At first, only eight peaks were permitted, but year after year more peaks have been opened. But it is difficult to grasp the whole mountaineering scene in China due to their political and social situation. It is said that such triangular iron towers were constructed by the army for surveying.

Though we regretted the fact that this unclimbed peak had in fact been climbed, we were very glad to make many good friends.

Members: Fan Yong Ning (Mrs), Overall leader, Chinese members: Wen Ying Zian (Miss), Ma Zhan Feng (Miss), Qi Wang (Mr) Interpreter, Reiko Terasawa (Mrs) Japanese leader, Japanese members: Sachiko Sawada (Mrs), Haruyo Ichikawa (Ms), Haruko Tsujino (Mrs).

Summary: The ascent of Yushu (5933m) by the Chinese-Japanese ladies team on 14 July 1994. The peak is located near the Kun Lun pass.

CHINESE-JAPANESE LADIES JOINT EXPEDITION '94

FOR Mt.YUSHU(orYUXU 5,933m)

Reported by Reiko Terasawa

Kunlun mountain range is known as the holly place of Taoism in China, especially on and round Kunlun Pass. The ladies joint expedition for Mt.Yushu was offered by The Qinghai Mountaineering Association in last summer. It was informed that our object was an unclimbed peak because of one of the most sacred mountains. It is situated on the west side of Kunlun Pass(4,775m) located just on Qing-Zang Highway links Xining, Provincial capital of Qinghai, to Lhasa in Tibet. The legend says that the emperor in heaven made his two younger sisters named Yuchu(or Yuzhu) and Yushu(or Yuxu) live on the earth permanently because he found that they had enjoyed taking a bath at the lake near Kunlun Pass secretly. Princess Yuchu was made to live on Mt.Yuchu(6,179m)and princess Yushu, on Mt.Yushu (5,933m).

On 30th June, we four Japanese members left by the air and reached Beijing at the same day. Next day we flew to Lanzhou and from there we were carried to Xining by the car. We joined Chinese members and staffs in Xining and got ready to our mountaineering.

On 3rd July, we left Xining and stayed at Heimahei, south side of Lake Qinghai, for four days to acclimatize to high altitude. After the acclimatization at Heimahei, we arrived in Golmud placed in famous Qaidam Basin.

On 10th, we passed through Kunlun Pass and went by the jeep toward the prearrange place as our base camp on the rough plain. Many wild donkeys, chilies(scientific name=*Pantholops hodgsoni*), some kinds of guinea pigs and others were running incrouds. It is said that we can see even wolves and wildyaks in forms. We

reached and established our base camp at past 20:00.

On 11th and 12th, we reconnoitered the south side of our peak and checked our route. After resting on 13th, we tried to attack the summit from our basecamp directly on 14th. We started from the base camp at 6:00a.m. and reached on the summit at 12:20a.m. All members could stand on the summit in spite of their first experience in mountaineering for two Chinese members and the interpreter because of the very gentle snow slope. But one triangular iron tower, 3m high, was waiting for us on the summit! All of us thought we had seen amiss, but it was there.

After the expedition, I queried the president of The Qinghai Mountaineering Association about the fact, but he was also surprized to hear our report.

In 1985, one of Japanese Alpine Club team was sent for Mt.Yuchu(=called Kakasaizimongka 6,179m) as their Club's 80th anniversary. They were informed that Mt.Yuchu was an unclimbed peak at that time. But they were also welcomed by a same type triangular iron tower when they reached the summit.

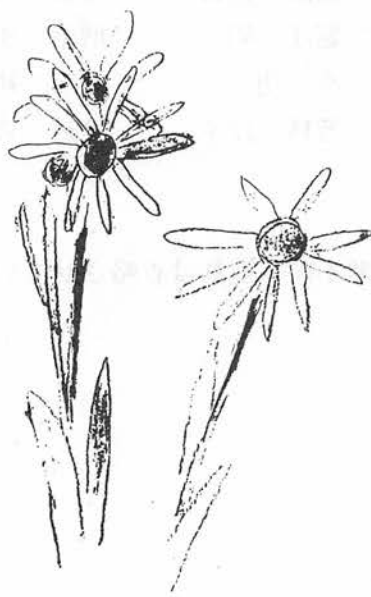
By the way, The Qinghai Mountaineering Association is holding International Mountaineering Camp round the Yuchu mountain range, two HAJ teams in 1993 led by Mr.Yamamori and in 1994 led by Mr.Sakai succeeded to climb Mt.Yuchu.

Mountaineering in China has opened since 1980. At first, only eight peaks were permitted, but year after year the opened peaks increased. But it may be difficult to grasp whole mountaineerings in China due to their complicated political and social reasons. It is said that the aforesaid triangular iron towers were constructed by the army due to surveying.

Though we regreted to find that with the unclimbed peak had in fact been climbed, we were very glad to get many good friends fine personality.

《MEMBERS》

Overall leader	Fan Yong Ning(Mrs)
Japanese leader	Reiko Terasawa(Mrs)
Japanese member	Sachiko Sawada(Mrs)
	Haruyo Ichikawa(Ms)
	Haruko Tsujino(Mrs)
Chinese member	Wen Ying Zian(Miss)
	Ma Zhan Feng(Miss)
Interpreter	Qi Wang(Mr)



1974.7/4. 青海省黑马河.

ご協力いただいた方々

－団体－

(株)アルテリア (株)ICI石井スポーツ 新ハイキング社
 (株)秀岳荘 (株)ティ・エッチ・アイ 美唄岳友会
 室蘭岳友会 わらじの仲間 HAJムスターグ・アタ登山隊1994
 ブリストル・マイヤーズ・スクイブ(株)

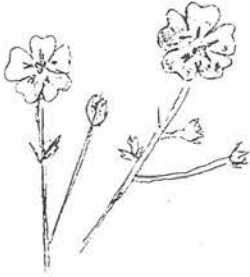
－個人－

阿部 淳	天城 敏彦	天城 素子	恵 秀彦
泉田 清幸	江尻 健二	大野 邦晴	大内 倫文
大久保 博	小倉 厚	尾崎 壮太郎	加藤 孝子
金子 珠実	亀田 佳恵	木下 祥子	栗原 圭子
小林 剛	小林 信子	佐々木 千恵	清水頭 厚子
白沢 真弓	菅原 愛里	関根 幸次	高野 千恵子
田村 正勝	辻野 健治	寺沢 善信	飛田 和夫
難波 治雄	芳賀 弘	日南 長二郎	藤原 泉
堀江 昭子	増田 能郎	松舘 正義	松山 昭
南 功一	宮川 裕子	森 美枝子	山口 恵美子
若林 洋子	渡辺 斉		

(順不同 敬称は省略させていただきました。)

編集後記

遠征から帰ってから1年半、ようやく、印刷所に持っていけそうで、ホッとしている。日本に戻ってきてから、報告書の担当は辻野さんだったよね、と言われて、えっ、そうだったっけと実はあわてた。(B Cのテントの中でそんな話をしたらしいが、高度障害か、全然記憶にない) だいたいルーズな私にまかせたら、いつ出来上がるかわからない……。案の定、忙しい中、みんな、急いで原稿を書いてくれたのに、速達で原稿を送ってくれたのに、結局こんなに遅くなってしまった。ごめんなさい。文句も言わずに待ってくれたみんなに感謝しています。(辻野治子)



－東崑崙・天女の山－

玉虚峰(ユイシュ・フェン)に登る

日中友好女性合同登山隊の記録

発行日 1996年2月10日

発行所 日本ヒマラヤ協会(H A J)

(The Himalayan Association of Japan)

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

☎03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954 「日本ヒマラヤ協会」

編集人 辻野治子

